西洋畫の感化殊に與つて力あり、しかれども西洋畫は維新以後に至りて始めてわが國に渡來し、わが畫に影響せしものにあらずして、遙かにその以前において既に傳播したりしなり。さらば今、維新以前の西洋畫に就いて略述せしめよ。

わが國が西洋諸國と交通せるは、既に室町幕府の政亂れて、世は戰國割據の姿となりし時にありき。當時、邊海無賴の民、隊を作り船に乘りて、支那海岸を侵掠し、慓悍當るべからず、明人これを倭寇と稱し、八幡船と呼びて、到るところ震駭す。これらの邦人が航路は、日本、支那近海に止まらず、南洋にまで及びて、その地に住める歐洲人と交易せり。歐洲はその頃、殖民貿易の事業盛んに興りて、新たに亞米利加を發見し、また喜望峰を巡りて印度に航し、諸國競うて遠洋の地を經略し、また通商を行ふ。天文十年、葡萄牙人薩摩に來り、ついで西班牙人も來る、これ實に西洋人が我國と交通せし初めなり。その後、天主教の宣教師相ついで來り、到るところに會堂を建て、貧窮を賑はし、疾病を療して、福音を傳へしかば、信徒は日に〳〵增加して、布教の區域はその根據地たる九州はもとより、中國、關東を經て、奥州に及べり。かくて慶長年間に至りて阿蘭陀、英吉利二國の人のまた來りて通商を請ふあり。家康の意も開國にありしが如く、江戸幕府の世のはじめは、邦人の海外通航もまた振興せり。伊達政宗の臣支倉常長が主命を奉じて羅馬に使したる、伊勢の人山田長政が暹羅に渡りて、その國事に大功を遂げたる、播州高砂の人德兵衛が三度天竺に渡りて、珍品を齎しかへれる、長崎の人濱田彌兵衛が臺灣に至りて、蘭人の暴横を懲らせるなどのことあり、いはゆる御朱印船の貿易も末賴もしくぞ見えたりし。しかるに渡來せる外人のうちには、布教交易に託して非望を企つるものあり、家康これを知りて異宗を禁じ、家光に至りて、更にその禁を嚴にし、また邦人の海外に渡航することを停む。禁令極めて峻酷に、九州邊陲の天主教を信ずるもの、その抑壓に堪へ兼ね、兇徒の煽動に誘はれて、こゝに天草の亂は起りぬ。亂は年を越えて平ぎしが、これより幕府益〻制を嚴にし、交易は

清蘭の二國にのみ許し、それすら來泊の處を長崎一港と定め、通航の船舶の數を限りたれば、全國は殆ど鎖港の姿となりて、以て幕末の世に及びぬ。

歐洲諸國と交通を始めしより、かの國の文化がわが百般の事物に影響せしことは、決して尠少にあらず。戰砲傳播し、築城法更まりて、攻戰の術は一變せり。服飾、器玩、飲食等の變遷せしことは、天鵝絨、繻珍、ちよろけん、さんとめ、もうる、ばっば、合羽、ぼたん、ぎやまん、かるたの類の用ひられ、たばこ、こんぺいとう、あるへい、かるめる、かすていら、かぼちや等の名ありしを以ても知るべし。されば、これらと共に美術品の輸入せられしことも、また思ひやらる。殊に天主教の傳はりては、禮拜のために聖主、聖母の像などその要多かりしをや。從うて由來技巧に秀でたる日本人が、かの國の手法を傳へて、自ら洋風を畫きしことも、また推すべし。今日に存せるそれらの西洋畫の最も古きは、何なりや、未だ斷言することを得ずといへども、子爵松平容大氏の所藏にかゝる泰西王族騎馬圖など、頗る古きものの一なるべし。その畫は金地に畫きて、人馬の姿

態の整ひたること、感賞するに堪へたり。この圖、今、四曲屏風となしたれども、もと會津の若松城の襖に貼りしものなりといふ。また傳へて、文祿元年、蒲生氏郷がこの城を築きし時より存するものとす。しかるに或は次にしるす山田右衛門作の筆なりといふは、根據もなき說なるべく、或は嘗てこれを東京帝室博物館に陳列せし時、標して山田總右衛門筆といへるは、愈その由るところを知りがたし。

日本人にして西洋畫に名の知られたる最初の人は山田右衛門作なり。右衛門作或は右衛門佐、右衛門七などしるせるものもあり、いづれか是ならん。右衛門作はもと有馬家の臣にして、天草叛徒の一方の大將たりしが、亂半ばにして歸順せしを以て、征討の將松平信綱これを助けて、江戸に伴ひ來る。明暦中、放火者あり、右衛門作の西洋畫をよくするを以て、信綱命じて犯人の像を描かしめて、通衢に掲ぐ、犯罪これより漸く止みたりといふ。後また天主教に關したりとて、右衛門作は終身禁錮の厄に遭ひぬ。按ふに當時の西洋畫は、天主教に關するもの多數を占めたりき。しかるに天草の役ありてより、異教の制禁は更に峻酷になりしかば、宗教畫は灰燼に附せられ、畫家は恐れてその技を隱し、これがために右衛門作等の遺筆といふも世に稀に、その術の傳統も一時全く中絶したりしなり。序なれ

ばいふ、明暦の頃、長崎に喜多元規あり、華蕃の畫法に併せ長じ、最も肖像をよくすと稱せらる。（先民傳）その支那風の寫生をなせるは、渠の遺筆によりて知るべしといへども、なほ西洋の畫法にも通じたりや、今、詳細を知りがたし。その頃また陳賢あり、蓋し歸化の明人なるべし、その筆に成れる文人畫風の觀音等、往々、世に存す。しかるに古畫備考の編者は渠の統本横物の婦人圖を稱して、西洋風なりとす。その畫を見ざれば、是非の評を下しがたしといへども、察するに二人ともに西洋の畫法を折衷せりといふまでのことならじや。（元規及び陳賢のこと第一期第四章を參照すべし。）

生島三郎左

これもこの頃の人ならんか。

十九世紀の文化は歐洲を中心とし、波紋を描いて遠く四方に傳播す、鎖港を以て國制とするわが國も、これが影響を受けずんばあらず。八代將軍吉宗實用の學を好み、夙に西洋科學の精緻なるを知り、從來、洋書の輸入は一切禁止の委なりしを、こゝに至りてその制を弛め、宗教に關はらざる圖書は交易賣買を自由ならしむ、西洋學術の研究これよりその緒に就き、天文、地理、醫學等の進歩頗る見るべかりき。この時また典籍に伴ひて西洋畫の傳はり來りしこと、疑ふべくもあらず。寶暦頃、江戸の奥村政信が浮繪の如き、天明頃、京の圓山應擧が繰繪（カウクリエ）の如き、いづれも西洋畫の遠近法を取捨せしものにあらずや。されどこれらはかの國の畫意をわが法に折衷せしのみ、いまだ西洋油繪を畫きしものにあらざるなり。しからば洋畫中興の祖とすべきは誰ぞ、世人概ね司馬江漢を以て、始めて密陀油に繪具を溶きて、西洋油繪に擬せし人なりと稱す。しかれども余はやゝこれに先だちて、平賀鳩溪のありしことを一言せざるを得ず。

平賀鳩溪

平賀鳩溪、名は國倫、字は士彝、風來山人、天竺浪人、紙鳶堂、福内鬼外等の號あり。通稱を源内といふ、讃岐の人、來りて江戸に住む。絶世の奇才にして、よくするところの藝甚だ多し。殊に本草、物産の學に通じ、究理、機械の術に長け、電氣の工夫、火浣布の製作など、その創意にかゝるもの少からざりしが、不幸にして

第廿九圖　鳩溪、西洋婦人

世に用ひられず、名利に猛き心は鬱屈のおもひに堪へず、不平のあまり、放縱自恣、世を愚弄し、時に戯曲小説の類を綴りて、幾かに悶を遣る。これらの事は世人のよく知るところにして、また繪畫に關係すること少ければ、略して記さず。余嘗て一古畫（大阪鹿田靜七氏藏）（第二十九圖）を見る、麁布に油繪具を以て西洋婦人を畫く。蓋し泰西の畫を摸せしものなるべしといへども、なほ邦人の手法にして、しかも習熟の技にあらず、落欵を施して源内といふ。簡古稚拙、その婦人の容貌に敢爲の風あるなどは、おのづから鳩溪の性を表はせるが如し。蓋し鳩溪嘗て本草、究理の學を修めんが爲に長崎に至りき、またその頃はじめて舶載せし蘭書ヨンストンス（著者の名にしては即ち博物圖譜なり、）を見て、垂涎のふまり家財夜具までも賣り拂ひ、五六十金を得てこれを購ひたりき。（春波樓筆記）かくして直ちに蘭人に就き、また蘭書を繙きたれば、多藝なる渠は、その術を聞きもし、試みもして、こゝにはじめて油繪を畫きたるならん。安永八年、人を殺して獄に下り、その冬、獄中に歿す、年四十八。（歿年或は安永九年の春ともいへり、年齢は高松の儒者片山達の鳩溪傳には四十

八とし、杉田玄伯の鳩溪の碑文には五十一とす、今、大概如電氏の説に從ひて、本文の如く定む。

鳩溪は西洋畫を以て顯はれざりき、これに次いで江戸にありて大いにこの技を興しゝは司馬江漢なり。江漢、名は峻、字は君嶽、不言道人、春波樓等の號あり。その氏名は、若き時、漢學を學びて支那の風に倣ひしなり。通稱を安藤吉次郎といひ、年四十餘にして土田氏に入夫す。（繪畫叢誌によるに、名人忌辰錄等には、俗稱勝三郎のち孫大夫とあり、記さず。）幼より畫を好み、やゝ長じて狩野古信（ヒサノブ）に學ぶ。（この江漢後悔記に出でたりといへども、甚だ怪むべし。古信は木挽町家、常信の孫にして、享保十六年卽ち江漢が生るゝ數年前に歿せしなり。）のち和畫は俗なりとし、轉じて法を宋紫石（紫石のこと第三期第一章にしるせり）に問ふ。時に明和七年、浮世繪師鈴木春信歿して、世人その技を惜む、江漢よりてその僞畫を作りて沽れるに、贋作たるを知るものなし。されどかくの如きは江漢の喜び甘んずるところにあらず、自ら春重と稱して、明の周臣、仇英が傳彩の法によりて、わが國の美人を畫けり。（このことも後悔記によれるなり。されど浮世繪師略傳には、江漢は春信の門人にして、明和八年の秋、二代春信といふといへり。江漢また文晁に學べりと稱せらるるされど江漢は文晁より年長けたること二十六歲にして、既にその一家をなしゝ時、文晁はなほ壯なりしなれば、ここの說も信

を置きがたし。江漢もと天文、暦數等の學を好み、古來、和漢の學藝の空漢に流れて、實地に疎きを悅ばず、深く精微なる西洋の學風を慕ひ、長崎に至りてこれを學ぶ。されど自ら奉ずるところの業は、實にこゝにありて、繪畫は渠にとりては行餘の末技のみ。その言に曰く、

「世の人を思ふに、人事の小道を知り好むものありといへども、天の大道を知るもの鮮し。われ久しく東都に居るに、諸侯貴客畫を好むもの多し、天を聞くもの更になし。たゞ中納言紀州侯一人のみ。日本小國といへども、罕にはわれを知るものあり、我往きて說くこと能はず、國を隔てゝ遠きが故なり。」春波樓筆記と。

司馬江漢

しかれども誇るところは必ずしも長ずるところにあらず、世評は却つて公平にして、江漢が歷史の上に重きをなすは、その銅版を創め、西洋畫を興しゝにあり。既に慶長頃、銅の活字版を以て書籍を刊行したりしが、一時のことにて、永く傳はらず、また材料の同じといふのみにて、版面を腐蝕せしめて書畫を現はす西洋銅版術とは、大いに選を異にしたりき。今いふところの西洋銅版術は、わが國にては、天明三年九月、江漢が刊行したるをそのはじめとす。江漢自ら記して曰く、「嘗て日本銅版の法を搜考る者なきに、曩の年、蘭人、彼國の銅版數百枚舶し來り、日本にて是を鬻んことを示す。其頃の人思ひ淺く、敢て之を奇工とせず、直に蘭人に返す。是時より始て銅に刻たる事を知れりと、予壯年の時、源内平賀氏に聞けり。天明癸卯歲、蘭書ボイスと云る書を閲するに、これを作るの法式あり、玄澤大槻氏と謀て、竟に銅版の製作を考ふ、是日本始めて草創する者也、然ども彼國の技巧を作者、亞細亞の人と其情を異す、其精妙及ぶべからず。」和蘭通舶と。西洋畫についてはまた曰く、「西畫は蠟油（ワニユ）を以て作

る、其法、往々、摸製する者あると雖も、其眞を得ず。嚆に崎陽の譯司辻氏なる者、西洋畫を摸て、浪華天神の社に掛く、是を奇觀とす。火災にてこれを失ふ。小子崎陽に遊で、畫を作る者を求るに、斷てなし。和蘭の畫法の書あり、コンスト、シキルド、ブークと云、蘭人テッシンギなる者其畫帖を予に贈る。而て後、竟に漸佳境に入て、今に至ては縱横にして、意に隨ふ處、心これに應じ、萬象を畫す。（同上）と。

按ふに江漢が西洋科學を好んで、頗る鳩溪と傾向を同じくせるは、鳩溪が感化與つて力あり。銅版を創製せるもその誘導を受けたるなり。しからば江漢が油繪を畫き出せるも、長崎にありて工夫を積みたること勿論なるべしといへども、その初めまた鳩溪が啓發によつて立ちしものならんか。その畫くところ今日より見れば、幼稚なるものなりといへども、當時にありては、巧緻精到また得がたきの才といふべし。著はすところ、銅版天球圖、同地球圖、同風景畫、同瀕海圖、和蘭通舶、和蘭奇巧、春波樓畫譜、東都八景圖、靈鷲山圖說等あり、江漢また文筆の才ありて、春波樓筆記を著はし、長崎に至りし時には西遊旅譚の著あり、西洋風俗圖（東京吾妻健三郎氏藏、第三十圖）はその筆に成り、よく江漢の筆致を見るに足るべきものなり。晩年みづから肖像を畫き（圖示するところこれなり）、題して曰く、

江漢が年がよつたで死ぬるなり、
浮世にのこす浮畫一枚。

と。かくて文政元年、七十二歳にして歿す。

江漢の門より出でゝ、銅版を製し、油繪を畫きたるものには、田善、安田雷洲等あり。田善、名は可大、通稱永田善吉、のち太仲と改む、氏名を約して田善といひ、また亞歐堂と號す、岩代須賀川驛の人。白河侯松平定信に用ひられ、江戸に出で、また長崎に遊びて、銅版の法を研究す。定信の子定永封を伊勢桑名に移さるゝに及び、辭して鄕里に歸れり。油繪を畫いては江漢に劣れりといへども、銅版の精緻なるは遙かにこれに過ぎて、また西洋の後にあらず。帆前船圖、淺草觀音堂圖など銅版の大作なるべく、また高橋景保（作左衞門）のために、萬國

亞歐堂田善

全圖、邊海略圖を彫り、宇田川榛齋の醫範提綱に添へんがために內象圖を刻す。そのほか彫刻せるもの少からず、絹帛の類にも銅版を摺りて、衣服、服紗などの料とせり。安田雷洲、名は尙義、通稱茂平、文華軒と號す、江戸の人、その銅版畫また世に行はる、金田江渊といふは、堀某の臣にして、また江漢の門人なりき。

安田雷洲
金田江渊

銅版は木版に比するに甚だ精緻なりしかば、創製の後幾ばくもなく傳播して、三都ともにその業を營むものあり、小さき紙面に諸國の名所を摺り出せるものなど、殊に行はる、されど油繪は餘りに目新らしく、從來の畫と異なるを以て、人却つてこれを喜ばず、從うて美術としての製作は學習するもの殆どこれなく、纔かにその畫意、畫技を應用することの廢れざりしのみ。その應用の一は、密陀油に溶きたる繪具を以て、硝子の裏に美人、景色などを畫きて、懸額とし、もしくは手筥の蓋に張りて、賤しげなる裝飾とすることなり。また一は泥繪具を以て芝居の道具立の遠見の書割を作り、覗き眼鏡の景色をか

第三十圖　江漢、西洋風俗

全圖、邊海略圖を彫り、宇田川榛齋の醫範提綱に添へんがために內象圖を刻

くことなりずなはち彼は繪具を、此は畫意を應用せるものにして、また江漢等が鼓吹の功なりずされどその遺功のかくの如きに止まりて、西洋畫の大いに行はるゝに至らざりしは、時勢の未だ到らざるところ、また如何ともしがたし。

かくて江漢が興しゝ油繪は、純正美術としては一時中絶の姿なりき。しかるにその後、幕末の世に及びては、上下共に益〻西洋學藝の精緻なるを覺り、競うてこれを傳習せんとす。而して幕府が主としてかの國の學術、技藝を修得せしめしところは蕃書調所(のちに開成所)にして、油繪の研究も更にこの處において行はれたり。安政四年、川上萬之丞繪圖調役となりしが、文久元年に至りて改めて畫學出役となる、これ調所にて西洋畫學を課せし初めなりずされどその爲すところなほ頗る幼稚にして、直ちに西洋人に就いて學びしにはあらず、舶載の典籍によりて、その法を研究し、併せて江漢が遺法によりて彩具を作りしものにして、刻苦の劃には良好の成績未だ揚らざりき。歳月の經

第四期　諸派角逐

過は一日も休まず、かゝる間に維新の世は來りぬ。

第五期　内外融化

明治の初年よりその三十五
六年頃までのことを概說す。

第一章　畫運衰微

維新の革新は古今未曾有の事變なり、畏くも天皇御親裁の世となりたるはいふまでもなし、職祿世襲の制を廢し、器に從ひて官吏を登庸す。四民は平等に、搢紳騶從の制を輕くし、喝道を止め、庶民、僧侶も氏を稱し、穢多、非人も平民に編入し、散髮を奬め、帶刀を禁じ、太陰曆を棄てゝ太陽曆を用ひ、西洋の式に倣ひて禮服を定め、銀行を設け、燈臺を置き、ランプ、瓦斯燈を點ず。汽車、汽船の來往ありて、百里の山海も一歩に約まり、郵便、電信の設備ありて、雲漠々たる遠路も比隣の如し、政治といはず、工藝といはず、衣食住及びその他の風俗のこと、多くは西洋の現制に則り、或は王朝の盛時に復り、いづれも急激なる變動を被らざるはなし。頑固保守の徒、一時、不平を唱へ、暴舉を計るもありしかど、紛擾直ちに收まり、歐米文化の優勝なること漸く世に知られて、上下共に

移殖をこれ競ひ、從うて物質的事物は實に急速なる進歩をなしたり。しかれども倫理、宗教、文學、美術の如き心裡の作用に關するものは、かくの如く急速なる變化を遂げ得べきにあらず、その古今興廢の狀を察するに、物質的事物の進歩に後るゝこと若干年にして、始めて開發の迹を認むべし。さらば明治の初期に於て、これらの道は江戸幕府時代の舊態のまゝに、よく當時の盛運を持續せしか。嗚呼、維新の歷史は破壞の歷史なり、物質的なるも、また然らざるも、從來の事物おほくはこの時に破壞せられ了んぬ。建設の破壞に伴ふは可なり、いかにせん、形而上の事物は、さきに信ぜしところ、行ひしところ、概ね破壞せられて、新たなる建設未だ起らず。維新後十數年間は世人たゞ外界必須の事物の改善に忙殺せられて、道德といひ、信仰といひ、趣味といふが如きことは、棄てゝ顧みず、一時、人心は混沌たる狀態に陷れり。柳條は風に隨うて或は東し、或は西す。當時わが國が規範とせしところの泰西の文化がいかなるものなりしかを見よ。十九世紀文化の物質的傾向は滔滔として歐米諸國に横溢し、機械の巧緻、電氣の妙用、よく森羅萬象の微を闡き細を剖きて、造化の工を奪ふ。實驗科學の研鑽は日を逐うて精しけれど、心靈向上の修練はこれに伴はざるなり。殊にわが師兄として最初に指導を仰きたる北米合衆國は、すなはち拜金功利の本國にして、工藝の發達など、一意邁進、直ちにその先進たる歐洲を凌駕せしかど、開國日なほ淺く、歷史的事實の見るべきもの多からず、從うて文學、美術の如きは、未だ著しき進歩をなさず、國人もまたこれを重んずるもの少くして、なほ幼稚の域にありき。されば この國を第一に學びたるわが國民が、物質的にのみ趨りて、經驗の歸納、機械の研究にたゞ日も足らずとし、更に一歩を進めて心靈界の味を嘗むるに至らざりしは、固より當然の勢なるべし。

倫理、宗教、及び文學などのことは、今こゝに論ずべきにあらず、たゞこの明治初期における美術が、いかに慘澹たる樣なりしかを思へ。維新の事變は一は國學の勝利ともいふべし。朝に立ちて政を行ふものには、日本固有の神道を

唱へ、佛教習合の弊を慨するものあり、神佛混合を禁じて、社寺の別を明かにし、一時、神祇官を設けて太政官の上に置き、なるべくは佛教を撲滅せんとさへ計れり。かくて千年以上よく混化し來れる兩部習合の制は、こゝに打破せられて、神社は佛教に關するものを斥け、佛寺は神道に關するものを除かんとしたれば、古來著名なる殿堂、彫像、圖畫、典籍等の惜しげもなく摧毀せらるるあり、灰燼に附せらるゝあり、崇奉措かざりし寶器珍什空しく塵埃に歸し、今日に至りては、これを回復せんとすとも終に及ばず。やうやくこの一時の破壞を免れたるものも、社寺ともに從來の料地を奉還して、自家の維持に苦み、累代傳承の器什の千金にも替へがたきを、些少の價に沽りて、却つて策の得たるものとす。士人もまた家祿を奉還して、馴れぬ產業に失敗し、資財を蕩盡するもの多し。さらでも怪しげなる洋風の家屋を造り、室內には拙き油繪、石版畫などを飾りて、雪舟、古法眼もまた惜しからずとす。社會の風潮およそかくの如く、急激なる變動に血迷ひて、歷史を忘れ、好尙を下し、こゝに乾枯無趣味なる時代を現出せり。

既に古來の美術品に對して世人の冷淡なることかくの如くなれば、その新作を顧みざることも推して知るべし。大小の刀の金具、印籠、袋物の根付の類に力をあつめたりし幕府時代の彫刻も、これらの器具の用ひられざるに至りては、その術も從うて廢れたること、多言を要せず。繪畫は如何。廢藩の令出づるや、狩野、住吉等の家々の將軍家に仕へし繪師は、平民に編入せられ、世祿を還さしめられて、公債證書をも與へられず、侯伯豪富も今はた自家の經營に急がはしくして、美術家を保護奬勵するに暇なし。世を擧げて俗のまた俗、物質的事物にのみ遑々として、餘裕なく、趣味なき社會には、美術家に不世出の才ありとも、その技を施すにところあらんや。まして泛々たる凡庸畫家の如きは、時勢の抑壓に堪へず、前後相率ゐて業を他に轉じて、活計の窮乏を免れんとす。著名の大家はさすがにその所信を棄てざれども、畫を以て家を立てがたく、已むを得ず些末なる事業に身を委ねて、一時の急を凌がんとす。靈

妙の技、鬼神に通ずる才を以てして、徒らに牛刀に鷄を割く、その志やまた憐むべし。狩野芳崖は明治の畫事を革新せし功勞第一の人なり、（芳崖のこと第四章なる見よ、）されど當時、東京にありて赤貧拭ふが如く、人の勸めによりて五十幀の畫を作り、これを賣りて衣食の料に充てんとせしかど、大道の露店に空しく塵を蒙るのみ、やうやくすべてを三圓にて田舍廻りの小商人に賣りて止みぬといふ。芳崖また貧に苦み、砲兵工廠の圖案課に備はれんとして試驗を受けしに、用器畫に落第して採用せられず。（近世匠談名かの天才を以てこの凌辱を受く、痛恨の極といふべし。）その他の名家も、困窮の狀相似て、東京なるは諸官省に備はれて器械畫を引き、京都なるは染織業の人に使はれて刺繍、友禪染の下繪を畫きなどして、幾かに糊口の計をなしたり。

明治の初期は一時の暗黑時代なり、しかれども暗黑のうちまた多少の光明のあるあり。維新の變に幕府は倒れて、江戸は最も大いなる打擊を受けたり、さばれ古川に水絶えず、江戸はさすがに江戸なり、打擊は大いなりしかど、彈力もまた大いに、殊に皇居はこゝに奠せられて、幾ばくもなく東京は昔にまさる隆盛の狀を呈せり。さればかくの如き斯道衰微の時にも、この都會には、なほ江戸時代の夕陽の殘光燦たるあり。この殘光たる畫家はその人一ならず、從うてその派も一ならずといへども、いづれも異流混和、雅俗折衷の潮流に從ひてその檝を向けぬ。諸派の比較研究をなし、上下の境を排せんとする傾向の、幕府時代の末に行はれたりしは、既に第四期に於て說きたり。今敍べんとするところの畫家は、すなはちこの傾向に伴ひて、等しく雅を俗に通じ、低きを高きに昇せんと試みたるものにして、前代の殘光たると共に、兼ねてついで來るべき內外諸流融化の大光明の曉星たり。これを數ふれば數人、そのうち、わけてすぐれたるを柴田是眞、河鍋曉齋とす。

柴田是眞

柴田是眞、幼名龜太郎、のち順藏と改む、その居を對柳と號す、江戸の人、若年にして古滿寬哉の弟子となりて蒔繪を學び、また鈴木南嶺に就きて繪畫を學ぶ。南嶺は渡邊南岳の門より出で、江戸にありて圓山風を畫けるものなり。そ

の頃、四條派の畫家には、京の岡本豐彥嘖々の譽あり、圓山と四條とはもとより兄弟の親ありといふべく、是眞は二十四歳の時、南嶺の紹介により、西上して豐彥の門に入る。かくて京にありて、その地及び奈良の古名品を觀察して、研勵刻苦、大いに得るところあり、師法を蟬脫して、別に一機軸を出し、傳彩鮮麗、意匠斬新、江戸に歸りて、聲名日に揚る。蓋し是眞の最も長ずるところは蒔繪にあり、古來中絕したる青海鬚を發明し、なほその道の發達に資したること多し。また漆を以て紙絹の上に畫くことをも搦めたるが、このいはゆる漆繪は多く行はれず。その畫は古今雅俗の諸風を己が藥籠に收めて、描きいだすところ概ね好趣あり、多く團扇、摺物類の下繪を畫いて、俳味に富む。その畫の俳味あるもの、江戸には既に酒井抱一あり、（抱一のこと第四期第二章を見よ）是眞これに次ぎ、洒脫の筆、清新の色、些少の物を寫して逸興紙面に溢る、恰も十七字の短詩なほよく人を動かすに似たり。明治五年、命を受けて延遼館の壁畫を作り、下りて二十四年、八十五歳にして歿す。是眞の京都に遊學するや、宋の李龍眠が筆になれりと稱する東福寺境內三聖寺の十六羅漢圖幅を觀て、深くその妙技に感じたりしが、のちその畫幅の賣却せらるゝ由を聞き、家財を賣り盡してこれを得たり、人その道に篤きを稱す。是眞性至孝にしてまた謹嚴、母の教を守りて、常に紋付、黑羽二重の羽織を着し、曾て品位をくづさず。當時、河鍋曉齋は是眞と相竝んで都下流行の兩大關と稱すべし、されど是眞は曉齋が放逸にして罪を得たるを惡み、これと伍するを恥ぢて請へども面せず。人あり、この二大家をして、各〻一幀を畫かしめて、對幅を作らんとす、是眞大喝して曰く、豈天下の罪人と筆を列ねんやと。是眞また老年に至りて京都に趨き、壯時同窓の畫家鹽川文麟と鴨涯の酒亭に會し、紫山明水を望んで轉、懷舊の念に堪へず。文麟顧みて曰く、子東京の繁華を誇るといへども、今この景に對すれば則ち如何。是眞徐ろに答へて曰く、しかも日夕この絕景を見るところの子の畫は如何と、文麟忸怩たり。（是眞の逸事は國華第九十七號所載の故川崎千虎氏の文による、是眞の事なほ第四期第一章を參照すべし。）

河鍋曉齋

河鍋曉齋、名は陳之、剃髪して洞郁といふ、はじめ狂齋と號し、また惺々如空と稱す、通稱周三郎、下總古河の人、江戸に住む。幼にして歌川國芳の門に入りしが、久しからずしてこれを去り、のち狩野洞白に學ぶ。洞白、名は陳信、駿河臺の家に出で、洞雲益信が七代の裔なり。曉齋これに學んで、狩野の骨法に通曉し、筆力頗る遒勁、師歿してのち、更に鳥羽僧正に私淑して、飄逸簡狂の筆を揮ひ、また廣く古來の名家の筆蹟を摸し、自家の才を以てこれを調和して、一家をなす。その狩野の風に傾けるはもとよりなりといへども、また浮世繪派が豔妖の筆致を得て美人を寫す。殊に武將をよくし、洋畫の法を折衷したるなどは、その出づるところ國芳にあるべし。また好んで怪奇の事物を畫き、厲鬼幽靈など屢、その筆に上る。筆端雲湧き龍躍り、縱横飛動、快活の趣は多く見ざるところなりといへども、ことさらに筆力を示すところ、誇張の弊に陷りて、風調野鄙に流れざるを得ず。曉齋性磊落粗狂、酒を被りて亂暴の行少からず。明治三年、下谷不忍辨天の境内なる酒亭に於て、書畫會の開設あり、曉齋醉に乘じて毫を揮ふ。その畫顯官を誹毀するものと認められて、席上直ちに捕縛の難に會ふ。四箇月にして免されしが、これより慚愧して、從來、狂齋と稱せしを改めて曉齋とす。明治二十二年、五十九歳にして歿す。信州戸隱山の中院の天井の畫龍、成田不動堂の大森彦七が鬼女と鬪ふ圖、湯島天神祠の野見宿禰、當麻蹴速が相撲の圖など、その傑作なりと稱せらる。刊行の書、曉齋畫談、曉齋漫畫等あり。（曉齋の事蹟は曉齋畫談によるところ多し。）

狩野洞白

月岡芳年

是眞、曉齋と同時にして、その技、その名、これに次ぐべきもの月岡芳年、小林永濯あり。雅俗折衷の傾向は彼此相同じといへども、むしろ是眞、曉齋は上流の畫を基礎として、浮世繪を添加したるもの、芳年、永濯は浮世繪に根據を定めて、上流の畫を取捨したるものといふべし。

月岡芳年、一魁齋また大蘇と號す、本氏を吉岡といひ、幕府の家人なり、芳年出でゝ畫家月岡雪齋（雪齋のこと第一期第三章に見ゆ）の後を嗣ぐ。はじめ歌川國芳の門に入りて、その風を畫き、のち前賢故實を喜び、また葛飾北齋を慕ひ、遂に進んで獨得

の一流を畫く、芳年風と稱して一時大いに世に行はる。明治二十五年、狂疾を發して歿す、年五十四。畫くところの錦繪には魁題百撰相、末廣五十三次、大日本武將名鑑、新形三十六怪撰、風俗三十二相、月百姿等あり。肉筆にて傳はるものは多からず、西新井の大師堂の火事場の圖の扁額、上野東照宮の桃園の三傑の圖の衝立など、僅かに世に知らる。門人甚だ多く、錦繪、新聞、雜誌の插繪の一時芳年の風に化せられざるもの尠かりき。小林永濯もはじめその食客として得るところありきといふ。

小林永濯

小林永濯、名は德宜、また鮮齋と號す、通稱秀次郎、江戸の人、十三歳にして中橋家の狩野永悳（名は立信、安信八代の齋なり）の門に入り、學ぶこと數年、のち明人の筆意を慕ひ、また寫生に勉めて一機軸を出せり。明治二十三年、四十八歳にして歿す。畫くところ小兒遊戯圖、萬物雛形畫譜、鮮齋永濯畫譜、及び近世奇聞、明治太平記の插繪等あり。

以上の諸家は明治初期に於ける有數の才なりといへども、その缺點もまた少からず。芳年の畫才は眞に天稟といふべけれど、行筆に惡癖あり、衣服の描法恰も木を割り板を張りたるが如く、佶屈贅牙、頗る怪奇の態をなす。永濯もその筆硬澀にして模型の中より出でたるが如く、たえて流動の妙を見ず。曉齋また筆力を衒ひ、獨り是眞はその弊少しといへども、なほ運筆に拘はるところなきにあらず。要するに諸家多くは鋒鋩露出して、蘊蓄の味なく、意氣迫りて綽々たる溫容なし、時勢の然らしむるところか。

田崎草雲

この時代に於て、地方に崛在せる大家を求むれば、まづ足利の田崎草雲、熊本の杉谷雪樵を推すべし。田崎草雲は江戸に生れ、幼にして文晁に學ぶ、また旗本の隱士川崎梅翁といへるものに就きて、はじめ梅溪と稱せり。天資豪放、末節に拘はらず、困苦に遭へども屈せず、南北を折衷して、優に一機軸を出す。慶應元年、足利に來りて、王事に盡しゝが、維新の業成るに及びて、その市街の西なる蓮岱山に白石山房を構へ、意を世事に絶ちて、閑日月を樂むされど畫名は漸く都下に喧傳せり。明治三十一年、八十四歳にして歿す。杉谷雪樵は熊本の藩士にして、その家、世々雲谷派の衣鉢を傳ふ。雪樵もまた雪舟を宗として

杉谷雪樵

刻苦精勵せり。安政年間、藩命によりて江戸に出で、俗務に鞅掌して殆ど畫事を廢せしが、そののち歸藩するに及びて、更に研鑽を積む。明治二十年、東京に來り、これより聲名大いに揚る。二十八年、六十九歳にして歿す。この二人の如きは、異數の大家と稱すべけれども、東西の二京さへ畫道衰微、名流凋落の非運に遇へば、まして地方の狀態は推して知るべく、たとひ數人の大家を數へ得たるにもせよ、明治の初期は、一時の暗黑時代なり。而して草雲、雪樵の如きは、この時代には時流に顧みられずして、草莽の間に潛伏し、その後、畫運の勃興と共に名を知られたりしなり。

第二章　文人畫の流行

維新以來十數年間は繪畫の暗黑時代なりき、しからばこの間はいづれの畫派も全く慘澹たる狀態に沈みたりしか。否、一般に論ずれば、暗黑時代といふを憚らずといへども、更に派を別けて說けば、盛衰おのづから差あり、凍風凜烈の間も、その色に誇る山茶花、水仙なきにあらず、畫界の嚴冬また春に先だてる花あり。この花は何ぞ、非運十數年の間却つて盛なりしは、いづれの畫派ぞ。まづ第一に天下を風靡したるは文人畫にして、これに次いでは西洋畫を數へざるべからず。その他の諸派がすべて悲慘の境遇に陷りしは、一は前章に述べたるが如き時勢の變により、一はこの二派の盛運に壓せられて然りしなり。

いかなればこの時代に於て文人畫が最も旺昌なりしか、その原因を數ふれば、凡そ三あるべし。第一は維新前流行の餘勢なり。顧みて前期のことを思ふに、文人畫の最も盛なりしを天保前後とす、その後幾ばくもなくして維新の改新成りて、物質界には未曾有の劇變を生じたりしかど、世人の美術的好尙は未だこれが爲に攪拌せられず、依然として、前代の傾向を續け來りしなり。第二は當時なほ文人氣質の人の世に多かりしことにして、これはた第一因

によりて然るなるべしといへども、別に掲げて論ずるを便とす。そも〳〵維新の改新は尊王主義の勝利にして、卽ち國學者の勝利なりと思惟せらるゝかれども更に考ふるに、幕末の世に當りて勤王攘夷を倡道せしものは、啻に本居、平田一流の純粹なる國學者輩に止まらずして、却つて漢學を修めたるものに多かりき。古くは靖獻遺言の著がいかに士人の義憤を興奮せしめしかを思へ、而してその著者は山崎闇齋に隨うて神道に就くを肯んぜざりし朱子學者淺見絅齋にあらずや。また水戸の學問がいかに愛國の精神を養成せしかを見よ、而してその學問は宋朝洛閩の儒學にわが國の歷史制度の學を交へたるものにあらずや。賴山陽、梁川星巖、藤本鐵石等は漢文漢詩を學びしものにして、或は陰に時代精神を鼓動し、或は陽に義兵を擧げたりき。されば維新の功臣といふも、多くは李杜の詩、八大家の文を學び來りし慷慨悲歌の士なり。維新以後十餘年間における普通敎育も、また國學にあらず、洋學にあらず、日本外史、文章軌範、四書、史記の類を修得するにありて、漢文を以て學問の根本となせること、毫も維新以前に異ならず。從うて漢學家、文人者流が全盛の時なれば、文人畫の前期に引き續きて盛を極めしも、また怪むに足らざるなり。

第三は當時の文人畫が正に時代精神に投合せしことこれなり。思ふに人心の西洋の物質的文化に傾倒したる時、筆墨を輕んじ、神韻を主とする畫風を喜ぶが如きは、一見すれば甚だ矛盾せる事なるが如しといへども、また決して矛盾の事にあらず。驚天動地の事變幾かに收まりて、激動の餘波なほ人心を蕩搖せしむる時、衣は骭に袖は腕に至る壯士の氣節を重んじて、修飾を屑しとせざるもの多く、思想はおのづから粗鹵に流れて、繪畫も形式姿態を調ふるを陋なりとし、精緻なる筆致を斥けて、卓拔なる氣慨の現はるゝを喜ぶ。されば たとひ物質的文化に憧憬する時とはいへ、靈麗なる色彩の如きは、却つて士人の賞翫すべきものにあらずとす。この時ひとり氣韻生動を第一義として、形似色彩を末技とする南宗文人の畫の行はるゝは、もとより當然の

安田老山

數にあらずやだゞに然るのみならず、文人畫は益〻極端に奔りて、蕪雜の弊は愈〻長ず。筆を投ぐれば雲煙湧き、石は芋頭の如く、蘭は葱の如く、米點亂打以て山とし、犬猫馬牛殆ど辨ずべからず、題語數句、これを以て畫家の能事を了せりとす。流行の勢は驚くべく、世人はこの畫にして畫にあらざるものを仰いで神品と稱し、競うてこれを床上に飾る。一言にしてこれを盡せば、大變動ののち、人心も畫事も共に粗笨にして放縱なりしなり。

當時、文人畫家として世にもてはやされしもの、東京の安田老山、京都の中西耕石を以て最とす。安田老山は美濃の人、養老瀑下に生る、故に名を養といひ、字を老山といふ、萬里翁と號し、のち字を以て名とす。その家もと高須藩の侍醫たり、老山家業を厭ひ、長崎に往きて畫を鐵翁（鐵翁のこと第四期第四章にいへり）に學ぶ。のちその師の門を追はれ、元治元年、支那に航し、上海に留まりて書畫を以て活計とす。時にかの地には、胡公壽の名一世に高きあり。胡公壽、名は遠、字を以て世に聞ゆ、横雲山人と號す、松江府華亭の人。人品卓絶、書畫共によくして、殊に

奥原晴湖

山水と行書とに巧に、作品の高尚なること當代その比を見ず、實に清國近世南宗の名手にして、しかもその筆意はやゝ北宗を帶び來れり。老山これを師友として大いに得るところあり、明治六年、歸朝して、東京に住む。稟性不羈豪邁、人に下らず、畫くところ淡墨側筆を以て塗抹縱横、一時翕然として老山の名天下に遍く、就いて學びまた畫を請ふものその門に滿つ。明治十五年、老山五十五歳にして歿す。（武藤竹陰氏によるところ多し。）

老山と比肩して東京に重んぜられしは奥原晴湖女史なり。晴湖は下總古河の人、江戸に出でゝ福田半香（半香のこと第四期第三章に述べたり）等に學びしが、のちその風を變じて清人鄭板橋に私淑す。板橋、名は燮、乾隆頃の人、殊に蘭竹または石を畫くに長じ、專ら草書の法を以て寫意の畫を作れりき。晴湖性豪放、風采男子の如く、旁ら武術を修む。畫くところ鄭氏の法を學んで山水、四君子をよくし、落筆雄健、勉めて筆を省いて意を長くし、揮灑一掃、人の心膽を奪はんとす。また學問に通じて識見甚だ高く、來りて學ばんとするもの多けれども、大抵これ

を辭す。嘗て切に請ふものあり、則ち諭して曰く、わが畫は只われこれを玩ぶのみ、以て人に敎へず、晴湖一代、その後またかくの如き畫を喜ぶものあらんや。卿等壯年よく眼を現代の時勢に注げ、今より後、畫を以て名を成さんとするもの、精緻なる泰西寫實の風にあらずんば不可なりと、よりて書を介して川上冬崖の門に入らしむ。（小山正太郎氏の談話による、冬崖のことは次章にいふべし。）晴湖の譽既に世に高く、老山歿して後、ひとり盛名を負ひしが、久しからずして文人畫は一跌また起たず、晴湖乃ち武藏熊谷在に閑居して、靜かに老を養ふ。明治三十六年、齡まさに六十六歳なりといふ。その養嗣子晴翠女史、今、東京にあり。菅原白龍またその高足と稱せられしが、既に歿せり。

福島柳圃

そのころ、福島柳圃、長三洲も東京に住して名あり。福島柳圃、名は寧、武藏那珂郡の人、はじめ柴田是眞等に學びしが、のち唐宋元明の遺墨を摸して、遂にその流を豹變す。明治二十二年、七十歳にして歿す。長三洲、名は莢、字は世章、豐後日田の人、廣瀨澹囪に學んで詩文に巧に、また書畫をよくす。維新の際、國事に

長三洲

奔走し、復古の後、東京に來りて官に仕ふ。畫名一時に高かりきといへども、その得意とするところは、もとより後素の道にあらざるべし。明治二十八年、六十八歳にして歿す。（三洲のことは第四期第四章を參照せよ。）野口幽谷は椿椿山の門より出で、瀧和亭は僧鐵翁に學びて、ともに東京に住めり。いづれも渾厚精緻の南宗畫家にして、絶えて粗暴の風なく、頗る老山、晴湖等と趣を異にす。されば明治の初世における名聲はかの二人に及ばざりしかど、文人畫衰微の後に至りても、その譽は墜ちず、畫を請ふもの相踵げり。幽谷は明治三十一年、六十八歳にして歿し、和亭は同三十四年、七十二歳にして歿す。

野口幽谷
瀧和亭

京都の中西耕石は小田海僊の門より出づ、渠に就いては、既に第四期第三章に於て述ぶるところありき、今再說せず。耕石に竝んで盛名相如きたるは田能村直入なり。田能村直入、名は癡、字は小虎、豐後岡の人、田能村竹田に學ぶ。竹田その才を奇とし、養うて子とす。來つて大坂に住み、のち京都に移り、畫名甚だ京坂の間に高し。京都に府立畫學校の起るに當りて、その南宗畫

田能村直入

の教師となりしが、のち退いて別に南宗畫學校を起す。されどその後この流の衰ふるに從うて、私學校の振興すべくもあらず、直入は去つて黄檗山内の獅子林院に住し、また移つて洛東若王子に閑居せり。直入嘗て大坂の富豪芝川氏の爲に宋元明清諸家の畫法に倣ひて、山水畫五十幅を作り、更にこれを縮寫し、小傳を附して汲古山泉といふ。明治三十六年、年九十に及びて精力なほ衰へず。

谷口靄山

谷口靄山、名は貞、越中富山の人。江戸に出でゝ高久靄厓に學び、のち京坂及び長崎に游びて、諸名家に益を請ひ、遂に貫名海屋のすゝめによりて居を京都に定む。明治三十二年、八十四歳にして歿す。（直入のことは第四期第四章を參照し、靄山のことは第四期第三章を參照せよ。）

平野五岳

維新以後十數年間、諸國における文人畫の流行は三都に同じ。地方には豐後の平野五岳最も名あり。五岳、名は聞慧、また古竹と號す、長三洲と同鄕の人にして、眞宗の僧なり。詩は廣瀨澹囪に學びて、句格流暢解するに易く、誦するに美はし。富士山及び熊本城下の作など、一時、世に傳誦す。書畫の名また高く、詩

胡鐵梅

書畫三絶の稱あり。明治二十六年、八十三歳にして歿す。（五岳のことは第四章を參照せよ。）尾張には、一時、清人胡鐵梅の假寓するありて、その名また聞えたり。胡鐵梅、名は璋、堯城子また杖期生と號す。多才の人、書畫ともに作り、畫くところ南北を折半すといへども、畫家としてその技を見るべくもあらず。明治十一年、來朝して名古屋に寓すること數年、のち歸りては更に來り、深くわが國運の進歩に感じ、歸國して頻りに開進說を唱へ、上海に新聞蘇報を發行す。康有爲の亂に清國政府の嫌疑を受け、また逃れ來りて神戸に居り、三十二年、五十二歳にして歿す。蓋し清國は既に叛亂相續ぎ、國運頗る非なり、從うて文藝の衰微もまた甚しく、維新の前後に至りては、もはやわが師表と仰ぐに足らず。しかれども邦人精しくかの國の形勢を知らず、なほ前代の餘習としてこれを尊崇するものありしが、その後漸くその爲すなきを知り得、二十七八年の戰役及び北清事變の後は、却つて彼より留學生を送りて我を學ぶに至りぬ。たゞ實用の學藝の傳習に急がはしくして、美術の如きは未だ顧みるに暇なきのみ。授

森琴石

受の關係の全く轉換せること、胡鐵梅の一生これを證して餘あり。（胡鐵梅のこと北方心泉師の談話による。）

文人畫は維新以前より傳播して、妍醜ともに賞せられ、長短併せ用ひらる、その流行實にこの時に窮まれり。物窮まれば必ず變ず、運命の一轉せんこと推して知るべし。こゝに明治二十年前後より文運の興隆すると共に、他の畫派は一時に振起し、從來これを壓せし文人畫は、今や却つてこれが爲に壓せられて、俄然として屏息し、盛衰恰も掌を反すに似たり。聲名一世に高かりし晴湖、直入等も都門を去つて閑地に老を養ふに至りしこと、前に述べたるが如く、東西二京の畫家は筆硯を更めて、また水墨の山水蘭竹を云ふものなし。だ大坂は由來、商工の業に關しては驚くべき進歩をこそなせ、文藝の發達は概ね二京に及ばず、今もなほ保守の氣運充ちて、從うて文人畫を賞するもの多し。されどその地土着の名家なく、たゞ鼎金城（金城のこと第四期第三章に述べたり）に學び、更に忍頂寺壽平（梅谷と號す）に就けりといふ森琴石等のあるのみ、諸派ともに微々として振はず、

かくして文人畫の昌運は一時の夢と消えぬ。興亡は波瀾の蕩搖するが如きもの、今日の廢れたるもの、明日また興らざることなからんや。されど余輩は既に文人畫の弊に懲りぬ、これに懲りたるもの、過ちを再びするが如きことあるべからず。形似を無視し、色彩を排斥せしが如きはその餘弊なり。しかり、餘弊にして、文人畫本來の趣意はこゝにあらず。この畫派たる、學者文人が學問の餘技とするもの多く、從うてこの弊害を釀すに至れりといへども、藝術に忠實なる南宗畫家のなすところ何ぞ、徒らに技巧を輕んずるにあらんや、技巧を琢くと共に、殊に思想を練り、作家の人格を養ひて、從うて作品の品位を高くするは、この派の長所なり。今よりのち更に文人畫の興るあらば、その短所を棄てゝ長所を採れるものなるべし。羨に懲りて膾を吹くが如きは、余輩の與するところにあらず、輕浮なる今日の畫風を見て、先哲の遺風を仰ぐことうたゝ切なり。

第三章　西洋畫の振興

文人畫は氣韻を重んじて、主觀的に事物の意を表はさんとし、西洋畫は寫生を主として、客觀的に形態の眞を傳へんとす。彼は水墨を主とし、此は傳彩に依る。彼此雲泥の相違あるものの、維新前後より同時に竝び行はれしも、また時勢の然らしむるところなり。要するに文人畫は過去の餘力の引いて今に存するものにして、西洋畫は將來の流行の魁たるものなり。維新以後、泰西の文化に沈醉して、百般の事物これを摸擬して及ばざらんことを恐れたるもの、ひとり繪畫に於てその數に漏れんや。

かくて文人畫と共に西洋畫も行はれたりといへども、明治のはじめはむしろ實用の方に馳せて、純正美術として賞せらるゝこと未だ遑からざりき。當時、西洋畫に名ありし人は、概ね川上冬崖の門より出でたり。冬崖、名は寛、通稱

川上冬崖

萬之丞、信濃の人、江戸に出でゝ、幕府の家人川上氏の養子となる。はじめ畫を大西椿年に學びて太年と號せしが、後文人畫を喜びて冬崖と改む。また深く心を西洋畫に潛め、幕末の世、蕃書調所に於てこれを教授せり。（冬崖のこと第四期第七章を參照すべし。）維新の後、下谷御徒町に聽香讀畫樓を設けてこゝに住み、なほ子弟の薫育に怠らざりしかど、その主として務むるところは、陸軍省參謀本部に出でゝ地圖を製するにありき。その門人のうち、宮本三平（はじめ元道といへり）は小學校生徒の畫學の手本を畫き、近藤正純（はじめ清次郎といへり）はその師に從ひて陸軍省の製圖に從事し、服部杏圃は陶器の下繪を畫き、山岡正章、狩野久信は開成學校に西洋畫教授の任に當る。ひとり高橋由一純正美術を標榜として、その獨得の伎倆を發揮するに務めたり。而して由一は冬崖のほかに、なほ英人ワーグマンに就いて學べり。

宮本三平
近藤正純
服部杏圃
山岡正章
狩野久信

ワーグマン

チャールズ・ワーグマン（Charles Wirgman）は英吉利倫敦府の人、はじめ武官の職にありしが、辭してロンドン・ニウス社に入り、安政年間その特派員として日

本に來れり。屢、わが國の風景、風俗を寫して、畫報を怠らず。その技術甚だ優れたるものにはあらずといへども、わが國の人が直ちに西洋人に就いてその手法を傳へたるは、由一等がこの人に學べるより始まれり。ワーグマン横濱居留地に住み、わが國に留まること三十餘年、明治二十四年、五十七歳にして歿す。

高橋由一

高橋由一、幼名猪之助、のち佑之助と改め、更に由一と稱す、江戸の人、世々、下野國佐野の城主堀田氏に仕ふ。由一幼より畫事を好みて、狩野畫及び漢畫を學びしが、西洋畫を見るに及んで、翻然として悟るところあり。蕃書調所に入りてこれを學び、更にワーグマンに就き、また上海に航し、その地の洋畫家に交はりて益を請く。忍耐刻苦、遂に一家をなし、明治六年、日本橋濱町に天繪社(のち天繪學舍と改む)を開きて、子弟に教授す。名聲隆々として揚り、現今わが國第一流の大家として盛名橋本雅邦と相比すべき川端玉章、荒木寛畝も、一時その門に入りて西洋畫を學べり。

高橋源吉

そも〳〵由一の畫くところ、今日より見れば、頗る和臭を帶びたりといへども、これを冬崖に比するに、畫意なほ純粹なる西洋畫に近し。冬崖の畫はその皮を洋にして、その肉を和にせるもの、擇ぶところの畫題多くは山水にして、しかも樹石の配合全く南宗より出で來る。この人一方に西洋畫家たると共に、また一方に南宗文人の畫を好み、一生その嗜好を捨てざりき。渠が文人畫家安田老山、奥原晴湖、福島柳圃、漢學者鷲津毅堂等と半閑社を結び、時に書畫の類を集め、これを品隲して半日の靜閑を樂めることなどを思へば、その畫くところの南宗の趣ある、推して知るべし。由一はこれに異にして、よく西洋畫の趣味を察し、專ら事物の寫生に務む。山水、名所等もとより畫けりといへども、寫すところはこれに止まらず、陋巷の風俗、臺所に散りぼひたる勝手道具などをも、あるが儘に描きて、その中の美を發揮せんとせるは、卽ち渠が先師よりも一進歩をなせるところなり。冬崖は明治十四年、五十四歳にして歿し、由一は同二十七年、六十七歳にして歿す。由一の子源吉父に繼いでその學

舍に子弟を教授せり。冬崖、由一につきては、小山正太郎氏の談話によること多し。なほ由一のことは高橋由一履歴にもよれり。

ワーグマンに學べるもの、殆ど既に一家をなせるものには高橋由一あり、なほ少壯なるものには、五姓田芳松、山本芳翠等あり。五姓田芳松の父を芳柳といひ、紀州藩の淺田氏の次子にして、江戸に生る、のち五家の姓を冒し來れるを以て、自ら五姓田と稱す。はじめ歌川國芳に學び、更に狩野派の畫家樋口探月（名は守保、鍛冶橋家の探淵守眞の門人なりといふ。）の門に入り、のち横濱に移りて、和洋折衷の畫を作る。いはゆる横濱繪にして、すなはち絹地に墨をぼかして陰影を現はし、多くは人物の肖像を描くもの、來舶の洋人の珍らしがりてこれを求むるもの多し。

五姓田芳松

芳松はその實子なり、幼にしてワーグマンに就いて神童の名あり、のち西洋に航し、遊學久しかりしが、歸朝後の名聲は幼時の希望に伴はざるが如し。父芳柳これと和熟せざることやありけん、別に門人倉橋芳雄を養うてその嗣とせしが、明治二十五年、芳柳六十六歳にして歿し、芳雄また芳柳と稱す。

五姓田芳柳（二代）

山本芳翠もはじめは初代芳柳に學びしが、ワーグマン來るに及びて、就いてこれに學べるなり。

山本芳翠

國澤新九郎

明治五年、土佐の人國澤新九郎、歐洲に航し、倫敦にありて畫事を修し、同七年、歸朝して東京麹町平川町に彰技堂を起す。畫界の新歸朝者として世人はこれを歡迎し、西洋畫に志あるもの多くその門に入る。明治十年、新九郎歿し、門人本多錦吉郎その後を承けて子弟に教授せり。新九郎の得意とするところは人物畫にありしが如しといへども、要するに未だ圓熟渾成の域に達せず。されどワーグマンに次いで、直ちに正則なる西洋の手法を傳へしものとして、畫壇に功勞なしとせず。これに次いで立ち、わが西洋畫界を震駭して、眞に斯道の革新を成したりともいふべきは、新たに來朝して直ちに洋畫の法を傳へしアントニオ・フォンタネジー（Antonio Fontanesi）その人なり。

本多錦吉郎

フォンタネジー

フォンタネジーは伊太利の人、佛國のコローに似て理想主義にかたむき、畫くところ詩趣津々、實にわが國に渡來せし西洋畫家の中第一等の名流なり。明治九年、政府は工部大學のうちに美術學校を置きて、西洋美術の養成を事と

ラグーサ　カッペレッチ

し、三人の伊太利人を聘して教授の任に當らしむ。フォンタネジーは繪畫を、ラグーザ(Ragusa)は彫刻を、カッペレッチ(Cappeletti)は用器畫裝飾術等を擔任す。フォンタネジーの來朝するや、蓋し謂へらく、東洋未だ西歐の文化に霑はず、指導者の來るを待てり。この時にあたりて西洋美術を以て日本を風靡し、續いてその勢力を東洋に逼からしむるものは、吾を措いて誰ぞと。かくて學校の運命も頗る有望にして、入りて洋畫を學ぶもの凡そ六十人ばかり、ワーグマンの門より出でたるものには、五姓田芳松、山本芳翠、聽香讀畫樓よりは、小山正太郎、松岡壽、中丸精十郎、天繪學社よりは高橋源吉、森本貞德、彰技堂よりは淺井忠、守住勇魚等、(これらの入學者の氏名は井氏の日本繪畫史による、)みな机を列ねてフォンタネジーに學び、從來區々の派を立てしもの、今や一統の緒に就き、畫界はこゝに一道の光明を放ちて、その炫耀ならんこと期して待つべかりき。

小山正太郎　松岡壽　中丸精十郎　森本貞德　淺井忠　守住勇魚

悲しいかな、事と志とは常に齟齬し易し。新來の大家は燃ゆるが如き活氣を以て、學校の完成に盡瘁したりといへども、實行意の如くならず。加ふるに恰も西南の役起りて、政府はまた文藝のことを顧みるに暇あらず、これがために畫學教室新築のことも中止の姿となりぬ。フォンタネジー快々として樂まず、遂に積年の抱負も畫餅に歸し、明治十一年九月、職を辭して鄉に歸りぬ。その十月、偶來遊せる伊太利人フェレッチ(Feretti)、これに代りて西洋畫教授の任に當りしかど、その技庸劣未熟、もとよりフォンタネジーに比すべくもあらず。學生みな服せずして、これを斥けんことを請ひ、却りて校規を紊すものとして、退校を命ぜらる。かくて十三年にフェレッチは解雇せられ、伊太利人サン・ジョヴァンニ(San Giovanni)これに次いで招聘せられしが、十六年二月に至りて解雇せられ、これにさきだちて同年一月、美術學校の企畫見るに足らず、有望の學生また退けられ、ネジー去りて後は、美術學校は廢せられぬ。概するにフォンタネジーこゝに洋畫の發達は一頓挫を來しぬ。されど今日西洋畫家として最も名ある大家の過半は、この時退校を命ぜられし學生より出でたることを思へば、フォンタネジーが一時の來遊も、また斯道に大功ありしなり。

フェレッチ　サン・ジョヴァンニ

川村清雄

當時の西洋畫界、別に一人の奇才川村清雄あることを忘るべからず。清雄も
と清次郎といひ、開成所畫學生徒として川上冬崖に學べり。明治三年、米國に
航し、また佛國に渡り、さらに伊太利のヴェニスに行きて畫事を究む。その渡航
するや、德川氏に隨行せるものにして、後おのれひとりかの地に留まり、印刷
局の留學生となりしなり。明治十四年、歸朝したるが、磊落粗放なる渠の性は
官職の掣肘に堪ふべくもあらず、退いてたゞおのれが好むところに任す。畫
くところ、材は洋にして意は和、これに對する褒貶も一ならずといへども、實
に斯道の一天才にして、殊に花卉器具を畫くに妙なり。柴田是眞の風を喜び
て、その畫のこれより出でたるもの多く、素地の木板または塗板に西洋畫を
かき始めたるも、蓋し是眞の漆畫に學びたるなり。惜しいかな、才あるもの多
くは勉めず、一身を美神に委ねて畫筇琢勵することなければ、材饒かなる割
には作少く、從うてその名も甚だ高からずして今日に及びぬ。
維新の前後より泰西文化の輸入に伴うて振興せる西洋畫は、既にフォンタネ
ジーの歸國によりて一頓挫を來し、更に形勢の變移によりて、大頓挫をなさ
ざるべからざるに至りぬ。盛衰は循環す、明治十四五年の交より、西洋心醉熱
の熾なるかたはら、一方には漸く國粹の發揮を唱ふるものあり、これが爲に
從來の日本畫の勃興すると共に、西洋畫は大打擊を被れり。十四年の內國博
覽會に油繪が美術品陳列區の多分を占めたるもの、これより數年の後に及
びては、共進會等にその出品を拒絕せらるゝ非運に陷りぬ。西洋畫家は已む
を得ず聲息を潛めて、重ねて時運の展開するを待たざるべからず。しからば
こゝに文人畫と西洋畫とを屏息せしめし、いはゆる畫運の興隆は如何。

第四章　國粹發揮

盛なるもの必ず衰ふれば、廢れたるもの更に興らずんばあらず、凍風和らぎ、
堅氷解けて、梅花まづ芳信を傳へ、九十の春光、紅紫亂れ咲きぬ。維新以後、物質

的事物の改善その緒に就き、十年の戰役收まりてまた數年、人心漸く穩かなるに及びては、こゝに文藝の發展を望まざるを得ず。衣食足つて禮樂あり、今や學制も次第に備はりて、學術の進歩甚だ見るべく、文學技藝においてもまた然なり。明治十年はじめて內國勸業博覽會を開き、同十四年その第二回を開き、美術品の出陳また少からず、久しく沈淪せし繪畫もこゝに興隆の運に向はんとす。

この章に論ぜんとするは、明治十四五年の交に端を發し、二十年代のやゝ三十年に近き頃までの事にして、畫運の復興はこの時に成りぬ。この復興はいづれの方面よりして起りしか、曩に盛なりし文人畫の益盛なりしものか、またやうやく芽ざしゝ西洋畫の愈榮えたりしものか、否、彼も一時、此も一時、復興の軍は却つて文人畫を抑へ、西洋畫を斥け、日本畫本來の特質を發揮すと稱して立ちしものなり。思ふに復興の正當なる徑路もまた實にこの外に出でざるべし。徒らに外國の文物に沈醉し、摸擬補綴を事とする時、いかんぞ一國文化の振興を期すべけんや。文化の振興は國民が己の力量を自覺し、己の意想を發揮するに成る。悠久にして貴重なる歷史を有しながら、すべてこれを放棄し、翻然他に轉ぜんとすとも、何の得るところかあらん。爲すべきところたゞわが特質を根據として、併せて外國の長所をも折衷するにあるのみ。而してこの特質發揮の旗幟を押し立てゝ、畫界を震蕩せしものは、また是眞、曉齋等の門流にもあらずして、全く別途に出でたるなり。

畫運勃興の偉功を樹てたるものの、是眞、曉齋等の門流ならざりしは、或はかれらの根柢の深からざりしにもよるべし。その文人畫派に出でざりしは、この派の宿弊の存するところ、もとより當然の數なり。されど時勢の順潮に乘りたる西洋畫家が、この功に與からざりしは如何。明治二十年の頃は西洋崇拜の最も盛なりし時にあらずや。十八年の官制改革は第二の維新とも稱すべく、その施設すべて泰西の制度を基礎として成れり。二十年に內閣總理大臣が假裝舞踏會を鹿鳴館に開きしがごときは、以て歐米心醉の最も盛なり

しを證するに足る。この時に當りてひとり畫運勃興が外風輸入と主義相反せる國粹發揮を標榜として成れるは、一般の時勢と矛盾せずや。然り、一見すれば甚だ矛盾するが如しといへども、しかも決して矛盾にあらず、國粹發揮は卽ち外風輸入の結果なり。はじめは西洋の事物を見て、徒らにそのあるがまゝを摸せしもの、その後進んでその爲すところを爲さんとす、さきにはその迹を見、今やその意を見る。歐洲諸國のなすところ、文學、美術等、いづれも勉めて國民特有のものを奬勵す、しかのみならず邦人が西洋の事物に沈溺せる間に、洋人の却つて日本美術の優秀なる所以を說くものあり、國粹發揮は西洋崇拜の蕭牆のうちに起りぬ。わが國民は他に聽いてはじめて自己を省み、更めて自ら有するところの富に驚けり。

フェノロサ

エルネスト・フェノロサ(Ernest Fenollosa)は阿米利加合衆國ボストン府の人、ハーバード大學を卒業し、明治十二年、わが東京大學に聘せられ、來りて政治、理財の學を敎授せり。殊に美術を愛して、敎授の旁ら熱心に我國の繪畫を硏究す。

元來、合衆國は建國の後、年を經ること久しからず、古代の遺蹟の見るべきもの少く、從うて現今の文藝もまた遙かに歐洲に及ばず。此國に成長せし人の眼に、わが國の美術はいかに映ぜしぞ。フェノロサの日本畫を見るや、感賞措かず、狩野永悳に就いて鑑識の法を修し、また同志の人と計りて鑑畫會を起す。蓋しその意に謂へらく、日本はかくの如くその源遠く、その術進める美術を有す、これを棄てゝ徒らに外國を學ぶは、自ら重んぜざるの甚しきものといふべし。一國將來の文化は、過去の歷史を基礎として建てられざるべからず、何ぞその迷夢より覺醒して、固有の長所を發揮せざると。頻りにその說を倡道して、日本畫の復興に勉む。これより遡き明治六年、墺地利の首府維也納に萬國博覽會の開設あり、我國また古代の美術工藝の傑作を出陳す。歐人或は驚いて曰く、余輩が從來日本を以て南洋諸島と相比すべしとなせるもの、今にして積年の謬を知れりと。外人が多少わが眞價を悟れるは、實にこの時に始まると稱せらる。この際大いにわが國のために盡力せし開成所の敎師獨

ワグネル
キヨソネ
ビゲロー

逸人ワグネル(Wagner)は、工藝に關して自己の特長を發揮すべしと奬め、次いで印刷局に在勤せる伊太利人キヨソネ(Chiossone)及び阿米利加人ビゲロー(Bigelow)も、日本古代の繪畫を愛して、これを蒐集したりき。されどこれらはいまだ大勢を動かすに至らざりしに、今フェノロサが極力日本畫の美を推奬するあり。その師奉せる西人にして既に然らば、わが國の人のいかんぞこれに動かされざる理あらんや。

佐野常民
河瀬秀治
山高信離
下條正雄
小原重哉

こゝにおいて前には工部大學の美術學校に西洋美術を教授せしめし政府も、今はその方針を一變して、日本畫の保護奬勵に力を致すに至れり。この主意の外に表はれたるもの二、一は展覽會に於てし、一は美術教育に於てす。展覽會は明治十五年、政府第一回繪畫共進會を開き、十七年、その第二回を開く、これよりさき十二年の頃より龍池會のまうけあり、佐野常民、河瀬秀治、山高信離、下條正雄、小原重哉等の諸氏、時に上野不忍辨天の境內に集りて、古書畫骨董品を展觀したりき。時勢の趨向は年毎にこれを盛ならしめ、三十年に至りては、この會を擴張して日本美術協會と稱し、毎年、工藝美術の作品の展覽會を開くこととす。政府、よりてこれを保護して、繪畫共進會を廢す。美術教育に就いては、フェノロサ等が說の出づるに及びて、從來、小學以上の生徒に、すべて鉛筆畫を課して得たりとせし文部省當局者も、頗る進退に迷ふに至りぬ。乃ち十七年、フェノロサ、岡倉覺三、小山正太郎等を委員として、圖畫教育に關することを調査せしむ。しかれども議論沸騰して、取捨決せず。かの如くば西洋諸國の情況を視察するに如くはなしとし、十九年、當時學事調査のため獨逸にありし濱尾新を美術取調委員長とし、またフェノロサ、岡倉の二人を委員として歐洲に派遣す。巡回年を越え、委員等が歸りて說くところ、また、美術を教ふるや、國民固有の技を基礎とし、基礎固くしてしかる後、外邦の長を取るべしといふにあり。その趣意によりて、將來美術の教育に關かるべき人を養成せんがために設けられたるもの、すなはち東京美術學校にして、二十一年十月、勅令を以てこれを建てられたり。この一節は濱尾新氏の談話によりたること多し。

濱尾新

圖畫取調の委員となり、美術學校の設立に勉めしもの、日本畫家としては狩野芳崖、橋本雅邦あり、共に畫運振興の急先鋒として、斯道に大功あり。この二人は從來萎靡して振はざりし狩野派に出づ。泝りて思ふに、因循姑息、俸祿の豐かなるに甘んじ、粉本の摸寫を事としたるは、狩野派の常態なりき。しかれども幕末の世、時運の變、移するに從ひて、閥族もまた株守の弊を脱し、比較研究の途漸く開けんとしたるは、余輩が既に說きたるところ、晴川等よりこの氣運は兆し、勝川また父についでやゝ古來の弊を脱したりき。（第四期第六章を參照せよ。）芳崖、雅邦は共に勝川の門に學ぶ。畫運革新の主將、明治美術界の偉人としては、余輩はまづ芳崖を推さゞるを得ず、雅邦よくこれと提携して功を樹てたり。

狩野芳崖

狩野芳崖は長門豐浦藩の士、その家、世々、藩の繪事を勤め、芳崖の父晴皐は卽ち木挽町家の伊川（伊川のこと第一期第二章にいへり。）の門人なり。芳崖年壯にして江戸に來り、勝川雅信に學びて勝海雅道と稱し、橋本雅邦と共に木挽町繪所門生中の獅子王と呼ばる。中にも芳崖俊邁の器あり、天成の才を揮ひて、屢〻古格に戻る。從來、狩野家の法、門生をしてひたすらに粉本の摸寫に勉めしめ、絶えてその開に自家の機杼をいだすことを許さず。今、芳崖のなすところ、頗る家法に違背し、その師もまたこれを怒る。されどひそかに渠の畫の拔群なるに感じて、强ひて詰責を加へず。

狩野芳崖

この時、恰も海内紛擾し、國事甚だ多端なり。芳崖故ありて故郷に歸りしが、わけて防長は勤王攘夷論の焦點となり、幕府が征討軍の發向となり、二州のうち亂麻の如くなれば、畫界の俊髦もその道に安んずること能はず、筆墨を擲ちて俗事

に身を委ぬ。維新の後も、また糊口の計に急にして、久しく畫事を顧みず、年を經て貧窮益〻迫り、明治十二年、意を決して東京に出づ。されど美術界の衰微はこの時に極まりて、有爲の才も施すにところなし。飢寒交〻至れるに、禍は禍を生みて肺を病み、辛酸の態名狀すべからず。明治十五年、雅邦の推薦により、島津公爵家の囑を受けて犬追物繪卷を畫き、纔かに一時活計の途を得たり。この繪卷、今、宮内省にありといふ。

第一回繪畫共進會の開設あるに當りて、芳崖一幀の畫を出陳す、されど顧みるものなし。第二回にはまた山水及び櫻下駿馬の二幀を出して、最下等の賞狀を受けたり。不遇まことに憐むべしといへども、物極まれば則ち變ず、名家はこゝにその知己を得たり。フェノロサかの二幀の畫を觀て感に堪へず、親しく芳崖を訪ひて斯道の談論に時を移す、意氣相投じて一見舊知の如し。芳崖また美術が學術、工藝と竝び待つて、一國人文の發展を卜すべきもの、日本の光華を萬國に知らしむるも、またこれに依るべきを覺り、重大なる責任の自家の雙肩に懸れるを思ひて、深く自ら誓ふところあり。フェノロサ、岡倉諸氏と共に周旋して、遂に東京美術學校の開設を見るに至れり。惜しいかな、力を致して果を見ず、始業に先だつこと四箇月、明治二十一年十一月、六十一歳にして歿す。芳崖の履歴につきては、森大狂氏の近世名匠談に詳しくところ甚だ委し。こゝにいふところ、これと諸家の談話とによる。

日本畫は東山時代以來、漢畫の風を受け、その狩野派なると他派なるとを問はず、概ね山水を畫くを以て主とし、殊に水墨の畫を多しとせり。芳崖また山水に一機軸を出し、勁健の筆と和柔の筆と併せ用ひ、濃淡黑白鮮かに、印象頗る明晰、一時、世人爭うてこれに倣ふ。しかれども芳崖の長所として他人の企及すべからざるは、その人物を描き、賦色をよくするにあり。批評家の曰く傳彩は西洋畫の特色なり、日本畫はいかにするともその半ばをだにもよくすることを能はずと。芳崖笑つて曰く、これ能はざるにあらず、試みるものの拙なるなり、われ今かの彩料を日本畫に試みんと。よりて仁王捉鬼の圖を作る。その筆奇矯に過ぎ、物品の配合やゝ當を得ざるものあるが如しといへども、燈光

と錦帳と映發して、五彩燦爛、まことに作家が設色の伎倆を見るに足ると稱す。この畫、今、ポストン美術館にありといふ。東京美術學校所藏の悲母觀音圖（第三十一圖）も、渠が畢世の大作にして、その永眠前五日に成れるものなり。同校にまたその草稿を藏せるを見れば、或は洋風の女神の如くし、或は從來の天人の如くし、稿を更ふること數々にして名家が苦心の尋常ならざるに驚かざるを得ず。その雲と山とにおいて、また觀音の裾、圍中の嬰兒などにおいて、やゝ奇矯の癖の露出するありといへども、概するによく無上の慈悲を表現して、遙かに王朝古代の名畫の壘を摩し、端麗溫雅譬ふるに物なく、設色の沈厚またよくこれに合へり。探幽以來、佛菩薩を畫いてよくその聖相を盡せるもの、芳崖を措いてそれ誰かある。

橋本雅邦

橋本雅邦、勝園といひ、また克己齋、醉月畫生の號あり、武藏川越藩の繪師橋本養邦の子、江戸に生る。芳崖より若きこと七歲、狩野勝川の高足として、その塾頭となり、維新以後、芳崖と提携して畫運の復興に勉む。美術學校の開設せら

第卅一圖　芳崖、悲母觀音

るゝや、入りて教授の主位を占む。生徒のこれがために啓發せらるゝもの多く、二十六年以來、横山大觀、下村觀山、西郷孤月、菱田春草等の卒業生を出すに及べり。のち雅邦出でゝ私立日本美術院の長となり、名聲益〻揚る。明治三十六年、まさに六十九歳、世人皆仰いで現代唯一の大家とし、寸縑尺墨も拱璧の如くす。畫くところ殊に山水に妙なり、また好んで道釋の類を畫くといへども、人物は蓋しその長所にあらず、設色もまた芳崖の匹にあらざるべきか。されどその斯道に於ける功勞を思ひ、また當今の畫家が概ねその下風に立ちて、その感化に甘んずるを見れば、雅邦もまた一世の人傑なるかな。

京都は延暦奠都以來、文藝の中心なりき。維新の後、皇居は東京に遷され、諸般の事物のこれがために萎靡せるもの少からずといへども、繪畫は製陶、染織の術と相伴ひて、依然として一大焦點たるを失はず。明治十一年、諸大家相計りて學校設立の建議をなしゝに、十三年七月、京都府立畫學校の開設あり、東西南北の四科を分ちて、岸竹堂、幸野梅嶺、巨勢小石、久保田米僊、田能村直入等

教授の任に當る、諸氏いづれも知名の士なるが中にも、竹堂は京都の狩野芳崖と稱すべきか。

岸竹堂

岸竹堂、名は昌祿、字は子和、本氏は寺居、江州彦根の人。幼より狩野派の畫を學び、年壯にして京都に來り、狩野永岳（永岳のこと第一期第三章にいへり）に學ぶ。されどその畫風に慊らず、久しからずして轉じて岸連山（連山のこと第四期第一章にいへり）の門に入る。連山そのの器を愛し、配するに女を以てして、家を嗣がしむ。明治の初期、畫運衰微の時は窮乏甚しく、纔かに機業家のために下繪を畫きなどして、活計を立てしが、後その名甚だ高く、畫を請ふもの門に滿つ。明治二十五年、農商務省の囑により、阿米利加閣龍博覽會に出品せんがために龍虎を畫き、眼睛を點じ了

岸竹堂

森寛齋

りて、則ち狂す、されど久しからずして癒えたり。三十年、七十二歳にして歿す。蓋し竹堂が得意とするところは鳥獸にあり、殊に虎は家祖岸駒についで屢、これを畫く。山水もこれに劣らず、好んで細尖の筆を用ひて、幽婉雅麗の景を寫す。嵐峽の秋景、紅葉の松綠に映ずる樣など、描き出して目覺むるこゝちす。しかれども世人が往々京都の繪畫を友禪風なりとし、その纖細綺麗を尙びて、豪宕の氣少きを誹るは、竹堂などまづその責を免るゝこと能はざるべし。琵琶湖圖屏風一雙（京都西村總左衛門氏藏）は渠の傑作なるべく、その一隻寒夜沿岸の圖（第三十二圖は八曲のうちの六折）の如きは、頗る洋畫に近きものなり。

當時、また京都にありて名聲の隆々たりしを森寛齋とす。寛齋、名は公肅、字は子容、本氏は石田、その家、代々、長州藩の士なり。年なほ若くして大坂に出で、森徹山（徹山のこと第三期第五章にいへり）の門に入る。徹山その技を賞して義子とし、旗幟を京都に樹てしむ。のち寛齋流行の氣運に促がされて、併せて南宗の門戸を窺ふ。幕末紛亂の際、勤王の志を懷いて、本藩の爲に盡し、斬殺の厄に遭はんとして、

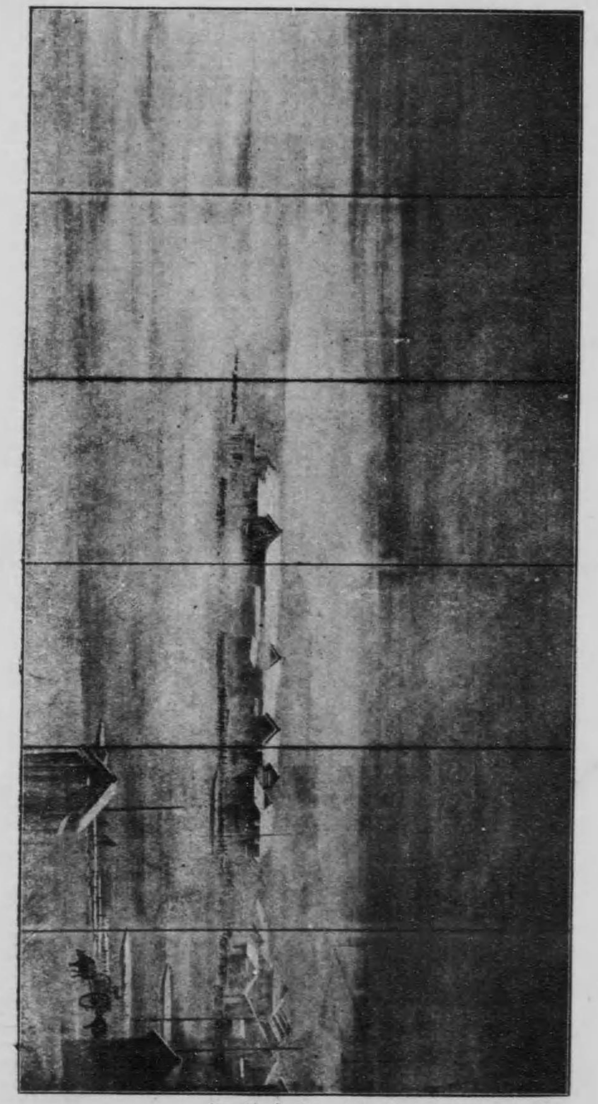
繊かに身を以て免る。復古の世、翻然として俗事を抛ち、清貧を樂んで、身を畫事に委ね、土佐光文、鶴澤探眞等と後素如雲社を結んで、後進を琢勵す。畫運の復興するに及びて、圓山派の如きは殊に世人に喜ばるゝ。されどその流を汲むもの、中島來章（來章のこと第三期第五章にいへり）及び大坂の徹山が子一鳳は、共に明治四年に歿し、來章の門人川端玉章は東京に移り、京坂の間、應擧の正脈を傳ふるもの寛齋あるのみ。從うてその世にもてはやさるゝこと益〻喧し。明治二十七年、八十一歳にして歿す。（森寛齋先生行狀記門人の今日に名あるもの、野村文擧、はじめ鹽川文麟に學ぶと、山元春擧等あり。思ふに、寛齋の名の揚れるは、その技術の秀拔なるによること固よりなりといへども、一はまた其の人格の高きによれり。單に畫道における勳勞より見れば、余輩はむしろ幸野楳嶺を取らん。

土佐光文　鶴澤探眞

野村文擧

幸野楳嶺

幸野楳嶺、名は直豐、字は思順、京都の人。幼にして中島來章の門に入りて圓山派の畫を修め、久しくして師の許を得て、四條派の鹽川文麟（文麟のこと第四期第一章を見よ）に學ぶ。更にまた前田暢堂、中西耕石（二人のこと第四期第三章を參照せよ）等の文人畫家に交は



鈴木一圓　竹堂、蘆花浴圖

りて、益を得るところあり。維新の後、困窮甚しかりしかど、意に介せず、四條を標榜として專ら畫事に勵む。硏鑽空しからず、畫運の復興と共に、その名嘖々として世に聞ゆ。明治二十八年、五十二歳にして歿す。著はすところ百鳥畫譜、花鳥畫譜、楳嶺畫譜、楳嶺菊百種、千草の花、亥中の月、工業圖式、毛筆畫帖等あり。楳嶺よく子弟を薫陶したれば、後進者の現代に名あるものの多きは、蓋し京都第一となす。菊池芳文、三宅吳曉、竹內栖鳳、谷口香嶠、都路華香等いづれもその門に出でたり。

以上の諸家はいづれも時勢の趨向に見るところあり、進んで畫運の興隆に勉めしものにして、明治文化の歷史に特筆してその功を勒せざるべからず。渠等が執りたる方針は、從來の日本畫を復興するにあり、わが美術固有の特性を發揮するにあり。しかれども一隻眼を具せるものは、誰しも認むべし、徒らに過去の狀態を株守して、他派の長所を容るゝを肯てせざるは、事物進步の道にあらざることを。わが特性を發揮すると共に、他の美點をも攝取し、彼

此融化して、はじめて眞の改善は行はるべし。而して畫界指導の任に當れる諸家も固よりこの徑路を取れり。中にも東京の芳崖、京都の竹堂、洋畫を應用せること最も多く、二人が特に他家の上に超然たるも、或る程度までこの折衷に成功したればなり。竹堂曰く、畫を學ぶものの西洋畫を參酌融化するや、よくこれを咀嚼玩味したる後にせば、渾然たる完璧、毫も補綴の跡なく、洋臭の嫌ひなかるべし。滔々たる作家は己に素養なくして、過分の事業を試み、彼を取らんとして、却つて彼に取らるを免れずと。（黑田讓氏の名家歷訪錄卷上による。）

內外融化はかくして着々として實行せられたりといへども、物の中庸を得るは難く、彼此いづれか一方に偏するは世の常に見るところなり。今こゝに敍述せる一小期の畫界一般の傾向は、もとより國粹の發揮にあること、明治二十年代の時勢を察すれば、おのづから點頭かるべし。そも〳〵維新以來、西洋文化の光華に眩惑せられ、何物も舶來と稱せざれば重視せられず、歐米心醉の極に達せしもの、その熱漸く醒めては、またわが國從來の事物を喜ぶに至りぬ。幕末の世、全國を震蕩したりし國學者流の思想は復興して、國粹保存の倡道盛に、學校には國語科の設けありて、國文の修練を重要とし、學界には國史の研究大いに興る。ペンキ塗の洋風模造の家屋は廢れ、五ツ紋の羽織、仙臺平の袴、折目正しき姿更に多し。形勢一變、國粹保存の氣の磅礴する時、繪畫が日本特有の長所を發揮するに勉めしは、正にその數なり。既に述べたるが如く、圖畫取調等の結果によりて、政府の方針もまた轉じて、日本畫の保護奬勵となりぬ。學校には毛筆畫を課し、西洋畫の展觀には容易に公會堂等を假さず。明治二十二年、宮內省に寶物取調局を設けて、全國社寺の什品を調査せしめ、同二十三年、同省に新美術奬勵のため帝室技藝員を置く。畫家のその選に擧げられしもの、二十三年に田崎草雲、森寬齋、柴田是眞、橋本雅邦、狩野永悳、守住貫魚あり、二十六年に野口幽谷、瀧和亭、幸野楳嶺あり、二十九年に岸竹堂、川端玉章、山名貫義あり、三十三年に至りて荒木寬畝あり。

時運の循環は止まらず、一昂一低、彼に進めば此に退き、かくの如く國粹發揮

の勢熾なりしに、明治三十年前後に至りて、形勢また一變するに至れり。

第五章　現代の盛運

明治二十八九年の交より今日に及ぶまでの數年間は、維新以後に於ける繪畫最盛の時期なり。なほ細かに論ずれば、三十一年の頃を界として、これを二小期に別つべし。かく別てるは、主として西洋畫の消長を標準として見たるものにして、畫界一般の趨勢よりいへば、前期最も光彩を放ち、後期に至りてやゝ逡巡の態あり。

二十七八年の戰役まさに終り、戰勝國の美名は八紘に傳はりて、歐米諸國の態度また曩日に同じからず。わが國民は東洋の經綸、清韓の輔導を以て自ら任じて、腕鳴り氣揚り、企畫は希望に伴ひて、萬般の事業すべて驚くべき膨脹をなしぬ。藝術界もとよりこの數に漏れず、彫刻、鑄造の術、或は洋風を學び、或は寫實に勉めて、急速なる進歩をなし、陶磁、染織等の精巧もまた未曾有と稱せらる。國民一般の趣味も開展して、藝術を愛する心漸く深し。錦繪は卑俗なるがためにまた振はず、男女の風俗の繪、大芝居の似顔繪はなほ出づれども、昔日の流行は見るべからず、戰役の後は、その事件を畫けるもの頻々として出で、西洋畫の陰陽の法を應用したるも多かりしが、これも暫くにして止みぬ。これに代りて流行し、發達したるは、雜誌、新聞紙の插繪にして、これを過ぎ去りし吾妻錦繪に比すれば、社會の好尚の變化一見して明かなるべし。

内國勸業博覽會は、十年の第一回、十四年の第二回、二十三年の第三回、ともに東京に於て開かれしが、その第四回は二十八年、世人が戰勝の祝賀に醉へる時、京都に開設せらる。兩三年來、隣邦の風雲穩かならず、人氣頗る沈滯せしもの時勢はこゝに一轉し、諸部の出品精を競ひ美に誇りて、岡崎の會場指顧に暇あらず。繪畫には東西二京の大家が鋭意邁進いづれも六曲屏風の大作を出陳するあり。西洋畫は前回よりその數は少けれども、その質は遙かに進め

り、光彩煥發、現代の盛運は實にこの會に於てその芽を表はしゝなり。

續いて明治二十九年に至りて、繪畫の氣運は更に勃然として頭を擡ぐ。日本畫に日本繪畫協會の起り、西洋畫に白馬會の出できたるは、この年のことにして、共にその第一回の共進會を東京上野に開く。畫會の設置の如き、事は小なるが如しといへども、これぞ年少氣鋭の作家が頻々として輩出して、斯道の改新を企てたる結果なるを思へば、また輕々に看過すべからず。その翌三十年は正にこれ斯道の最高潮に達せる時、その世人の注意を引きたるも、殆どこの頃に極まりぬ。古代藝術の保存を計らんがためには、政府が古社寺保存法を發布して、特別保護建造物及び國寶の調査に從事するあり、京都には京都後素協會が主となりて、全國繪畫共進會を開けるあり、東京にはもとより繪畫協會が第二、第三の共進會あり、また白馬會の展覽會あり。苟くも丹青に志あるものは、全國到るところより奮うて出品して、その技の優劣を競へば、これを觀るもの集りて堵のごとく、貴紳富豪がその作品を購ふものまた甚だ多し。新聞に、雜誌に、美術批評の沙汰この時より盛なるはなく、毀譽褒貶、鏑を削りて爭へば、昨日無名の人も一躍して大家の譽を博すべく、青年が名利ともに得べき途は、この技に從事するを最も近しとする世のさまにて、年少多血の人は競うて筆を舐るに至りぬ。而して當時、繪畫の進歩におのづから二道の潮流あり、一は繪畫協會に伴へる日本畫の開發にして、一は白馬會を主とせる西洋畫の勃興なり。次にこの二潮流を相別つて一々に說かしめよ。

川邊花陵
山名貫義
豬瀨東寧
大出東皐
野口小蘋

まづ日本畫の開發について說かん。そも〳〵十七八年以來、日本畫復興の運に向ひ、維新以後、轗軻落魄せし諸派の大家も名聲更に揚りて、各〻執筆の暇なかりき。かくてこの時代に至り、東京にありてなほ老大家として崇仰せらるるものの二三を擧げんか。土佐より出でたる川邊花陵、住吉より出でたる山名貫義は共に仿古を主とし、南宗の豬瀨東寧、大出東皐、彼は山水を畫いて格式を守り、此はよく花卉翎毛の眞を寫し、野口小蘋、巾幗の身を以てこの宗の

竹永湖　熊谷直彦　村瀬玉田　望月金鳳　松本楓湖　渡邊省亭　鈴木華邨　尾形月耕

正脈を傳ふと稱せらる。文晁派に佐竹永湖あり、四條派に熊谷直彦、村瀬玉田、望月金鳳あり。松本楓湖、容齋に學んで歴史畫を畫き、渡邊省亭、同門より出でて鮮麗なる花鳥を喜ぶ。鈴木華邨、また同じ流れを汲んで巧緻に傾き、尾形月耕浮世繪より起りて神速を尚ぶ。そのほか知名の士なほ十指を以て數ふべく、その製作は屢美術協會の展覽會に於て見るを得べし。渠等はもとより畫運復興の功を分つべく、中には多少の變化を試みたるものもあるが、古に鑑み今を顧みて、明治の新日本畫を立つべき偉大の任を負ふものはあらず。當世の風尚に合するものもなきにはあらざれども、あれば即ち時好に投ずるものにして、これを導くものにあらず、如何ぞ一世を動かすべき。たゞ川端玉章、荒木寛畝、久保田米僊の如きは、巧拙の差こそあれ、共に一新機軸を開かんとしたるもの、その功は沒すべからず。しかれども一個獨得の風を畫きて、青年を感化する力最も強く、こゝに明治の日本畫として、殆ど一新時期を劃するに足るべき業を成したるは橋本雅邦その人なり。以上の諸家いづれも現存してその名藹々たり、

川端玉章　荒木寛畝　久保田米僊

たゞ實義は明治三十五年に歿し、米僊は盲しして筆を執ることを能はず。

芳崖の變化を試むること頗る急進的なりしに比すれば、雅邦は却つて保守の傾向ありといふべし。しかれどもこは たゞ芳崖に比してしかいふのみ、一般にいへば、芳崖と肩を列ねて新風開發の志を同じくし、美術學校の開くるに及んで、玉章等と共に生徒教授の任に當りぬ。名家の鞭を上ぐるや、これに從ふものすべて風前の草の如し。こゝに於て美術學校一派は美術協會派が着々として清新の風を畫くが如しといへども、その實なほ近代の畫風を保守するに過ぎざるを慨し、雅邦、玉章を主領として遂に日本繪畫協會を立つ、その旗幟とするところ實に急進主義にあり。美術協會派に屬すると屬せざるとを問はず、この擧を壯なりとするものは、みな走りてその麾下に就き、勢恰も旭日の曈々たるが如し。

横山大觀　下村觀山　西郷孤月　菱田春草　寺崎廣業

繪畫協會派の中堅には横山大觀、下村觀山、西郷孤月、菱田春草等の美術學校卒業生、平福穂庵の門より出でたる寺崎廣業、及びはじめ京都に學び、のち東

川合玉堂

上して雅邦に就きたる川合玉堂等あり。渠等の多數は最も雅邦の感化を受けたるものとせば、その畫くところも全くその師と同一の筆法に出でたるか。何ぞ必ずしも然らん、明治の教育法は江戸時代に異なり、ひたすらに粉本の摸寫に勉めて、一毫も師法の外に出づること能はざるは、過去の弊習にして、今誰かこれを顧みん。教師の爲すべきは、子弟の才を開發するにありて、これを束縛するにあらずとするは、今日の風潮なり。されば渠等は固より一人の法を株守せず、古今の諸派を渉獵して、その好むところを取捨せり。雅邦は近世の狩野に慊らずして、遠く東山の盛時に泝り、雪舟、雪村等の妙趣、下りては海北友松の筆致を得んとするもの、その後に從ふもの或は別途に出でゝ、遙かに奈良、平安の昔に憑據を求むるもあり、鎌倉の盛時を追想するもあり、人によりて往くところを異にし、時によりて居るところを移す。いづれも新地開拓の念に驅られて來往出處するもの、輾轉反側の情想ふべきなり。かくの如く諸家その手法を同じくせずといへども、さすがに師は師なり、畫道の要訣は、これをその門流に浸潤せしめずんばあらず。子弟の功を成すも師なり、これを過まるも師なり。しからば雅邦が倡道し鼓吹したる要訣として、諸家が服膺したるものは何ぞ、渠のいはゆる心もちを主とすること是なり。その旨に謂へらく、近代の畫家多くは法格に拘泥して、繪畫の本源を忘れたり。繪畫の本源は感想にあり、よく造化の妙機を捕捉し、その感想を表現せしむれば、畫家の能事は了れり。法格の如きは深く問ふところにあらずと。よりて渠の一派は、一時、觀念派の名を得たり。されば、この派には大觀の寂靜、無我の如く、抽象的觀念を畫題としてその意を畫かんとするもの多く、また觀山の佛誕、春草の微笑の如く、高遠なる宗教的觀念を寫さんとするも少からず。勉めて着想を重んずる結果は、おのづから形似の必要を忘れ、手法の彫琢を輕んずる弊を生ず。さなきだに從來の日本畫家は寫生を喜ばざりしに、今この觀念主義の倡道のあるあり、從うて出づるところの畫は、舊樣を脱して頗る面目の新たなるもあり、幻怪に過ぎて徒らに人を驚かすもあり。二十八

年の博覽會に雅邦が龍虎の屏風の出づるや、褒貶區々、審査委員はその畸形に過ぎたるを以て、賞を與へず。その第一回繪畫共進會における虎溪三笑の如き、或は稀世の神品と稱へ、或は高士も癡呆のみと誹る。第三回の大觀が說法の聽衆、觀山が繼信最期は、はじめて近年流行の巨大の圖を畫けるものにして、或はこれを明治の一大進歩とし、或は志のみ大いにして技これに添はず、塗抹を事とするのみとす。批評は見る人によつて異なれども、とにかくに從來未だ曾て爲さゞるところを試みて、その成否如何を世に問ひたるものにして、その想と技と併行せざるや、世人の目して化物派と嘲りしも、また故なきにあらず。

繪畫の開發を計れるもの、その弊の存せしことは否むべからずといへども、その功勞は決して殁すべからず。一般に論ずれば、古今東西を比較してその長所を採り、從來の花鳥、山水に甘んぜずして、歷史的事實の描寫を試みたり。いはゆる浮世繪も進歩して、他の畫派との劃然たる區別もなく、その實なければその名も失せ、普通の畫家の時樣の風俗を畫くも少からず、西洋畫を參酌して新たなる傅彩の法を用ふるも多し。その成功如何は暫く問はず、これらはいづれも畫道進歩の徑路にあることを示せるものにあらずや。

黑田清輝
久米桂一郎

次に西洋畫の勃興に就いて說かん。さきに日本畫の復興せしより、これに反比して西洋畫は沈淪振はず、公設の學校既に廢せられ、その道行はれざれば、大家の門前も雀羅を張りぬ。されどこの間また一道の燈光暗夜に燃え、滔々たる時勢に反抗して、將來の恢復を計るものあり。明治二十一年、小山正太郎、松岡壽、淺井忠、川村清雄等の西洋畫家相計つて明治美術會を起し、その秋、第一回展覽會を上野にひらき、爾來、年々、展覽會を催し來れり。しかるに二十七八年戰役の終れる頃に及んでは、新たに歐洲より歸朝したる黑田清輝、久米桂一郎あり。共に佛蘭西の巴里に在學し、ラファエル・コラン (Raphael Collin) に就いて清新の風を學びて、頗る從來の伊太利派より出でたるものと趣を異にし、またかの國の印象派といふに倣ひて、殊に紫色を喜ぶといふを以て、一時、

紫派の稱を得たり。第四回内國博覽會の開設あるや、清輝朝妝圖を出陳す、赤裸々の婦人が鏡に向ひて髪を刷へる樣を畫けるものにして、邦人の裸體畫を公衆に示せるはこれを初めとし、賞贊と非難と交〻至れり。

清輝等の新派の氣焔甚だ高く、時勢もまた漸く轉じて、眼を西洋畫に向くるに至りぬ。從來專ら日本畫の開發に勉めたる東京美術學校も、こゝに鑑みるところあり、二十九年、西洋畫の一科を設けて清輝をしてその力を教授に致さしめ、桂一郎をして考古學、美術解剖學を教へしめ、洋風彫刻と併せ行はれしむ。この年また清輝、桂一郎等を中心として、新進の西洋畫家及び批評家が白馬會を設くるあり。この會に入れるものは、袂を聯ねて日本美術會を脱し、新たに旗幟を立てゝ、年々、展覽會を開く。恰もこれ日本繪畫協會が美術協會に慊らずして成れると同一筆法にして、いづれも漸進派に對する急進派の獨立なり。第一回白馬會展覽會の小督、第二回の智感情、ともに清輝が筆に成り、雅邦の龍虎、三笑の如く、毀譽の評甚だ喧ましかりき。

現代の前期は、かくの如く日本畫の開發と西洋畫の勃興と併行し、活氣を以て滿ちて、明治三十一年に及びぬ。この年恰も東京美術學校に紛擾あり、畫界はこれを門口として、後期に移れるが如し、紛擾とは何ぞや。そも〳〵岡倉覺三は日本美術の進歩に功勞ありし人、美術學校創立以來、その校長として同校設備の整頓に盡力したるは、世人のよく知るところなり。しかるに三十一年三月、帝國博物館の美術部長及びその理事の職を辭し、尋いで校長をも辭す。橋本雅邦、下村觀山、横山大觀、寺崎廣業、菱田春草、西郷孤月等、子弟教育の任に當れるもの、一は政府の處置を憤り、一は校長の情を想ひ、相率ゐてまたその職を辭す。この辭職の輩は直ちに計りて、谷中に日本美術院を設置し、わが國美術の特性を經とし、作家各自の特長を緯として、これが開發維持を圖ると稱す。而して日本繪畫協會の主權は依然として渠等の手中に存し、或は帝都に、或は地方に、共進會を開いて斯道の擴張に勉むしかれども繪畫協會の旺盛は既に三十年に極まりぬ。旺盛の裏には、衰廢の種あり。作家のうちには、

前の美術學校派にして後の美術院派なる急進過激の輩が、ひとり優賞を占むるを喜ばず、別に旗幟を立つるものあり。かくして日本畫會、無聲會、日月會、丹青會等の小會續々として起り、春秋の好時節には、諸會爭うて展覽會を開く。研究會の蜂起は以て畫道の普及を證するに足るところの祝すべき現象なるが如しといへども、青年諸家が退いて素養を積むよりは、進んで名利を求むるに急にして、頻りにその聲を大にせんとするものあらば、そは識者の與せざるところならん。

美術學校長等が辭職の事件は、純粹なる美術上の意見の衝突よりも、むしろ情實の蟠り、感情の合はざるより出でたりとせば、それらの原因に就いては、穿鑿の要あるを見ず。たゞこの事件の結果が、偶然にも和洋二派の勢力の消長に伴へるに至つては、聊か注意せざるべからず。かの事件の起るや、日本畫の教師には、橋本雅邦及びその一派は辭し、川端玉章は留まり、缺員を補はんが爲に荒木寛畝、山名貫義は入りて教授の任に當れり。しかれどもこれらの在職の人の勢力は、到底引退の老畫伯が匹にあらず、雅邦一たび去りて、校內における日本畫の光明は西洋畫に蝕せられ、清輝等の一派大いに手腕を揮ふに至れり。時運も共に移りて、西洋畫を賞するもの漸く多く、その道の老手の一世を壓するもの、日本畫の雅邦の如きは未だ出でずといへども、一般の形勢は刮目して見るべきものあらんとす。

明治三十三年には、佛蘭西巴里府において萬國大博覽會の開設あり。今やわが國は俄かに位置を進めて列國と肩を竝ぶれば、彼は極東の新强國に對して注意の眼をこらし、我は西歐と相離れたる別途の文藝を世界に示さんとす。諸種の藝術の作品の出陳せらるゝもの多く、また觀光のために渡航するものの前後相踵ぐ。されば、この博覽會は東西相知悉するの好機會となりて、これより畫界にも西洋畫を尙ぶ氣風は益〻加はりぬ。留學及び觀光の士多くは謂へらく、かの國の畫を觀て、さて日本畫の陳列場に入るや、淋しく、みすぼらしく、色澤なく、情熱なく、明月の前の星辰の如しと。この年、老手淺井忠、新進の

和田英作

士和田英作の文部省より佛蘭西留學を命ぜらるゝあり、その前後また私費を以て往き遊ぶもあり、西洋畫家の活氣は日に加はりぬ。勢かくの如くなれば、日本畫家も飽くまで西洋畫の長所をわが畫に採用せんと欲して、或は描線の法に、或は傅彩の術に、いづれも歐風を加へ、混交の跡歷々として見るべく、煩悶懊惱、功未だ成らず、不統一無調和は實にわが畫界に瀰漫せり。三十三年の繪畫共進會における菱田春草の放鶴は墨線を廢めて、專ら色彩に委ねんと企てたるもの、西郷孤月の高砂は金泥を以て隈なき日光の映射を寫さんと試みたるもの、蓋し極端に日本畫を西洋化せんとしたるものなるべく、功はいまだ成らざれども、その勞は忘るべからず。

この頃に至りて俄然として力を加へ、精鋭の兵を提げて、東京畫家の城壘を奪はんとしたるを、京都畫壇の形勢とす。元來、京都は千年以上の歷史の束縛ありて、保守固陋の弊ありしに、明治の遷都より、市民はその主腦を失ひたるが如く、藝術發達の指針たるべき學問は與らず、これに鞭撻を與ふべき氣力は振はず、沈滯姑息、風をなしぬ。さすがに畫事はなほ全國の一大中心たるを失はず、その道の復興とともに、また次第に盛なるに至りしが、なほ東京には常に一歩を讓り來れり。しかるに二十八年の内國博覽會はこの地に開かれ、三十三年の萬國博覽會には、市民の往きて視察をなすものあり、勃々たる英氣の發揚すると共に、京都藝術の精華たる繪畫は著しく光彩を加ふ。今日の老大家として世人の尊崇するところの畫伯には、鈴木松年、今尾景年、望月玉泉、原在泉等あり。（玉泉のことは第三期第二章、他の三氏のことは第四期第一章を參照せよ。）されど將來の發展に功あるべしとして余輩が注意すべきは、むしろ中年以下の畫家にあり。中にも竹内栖鳳の名最も高く、近頃、渡歐して歸りしより、多く西洋の景物を畫く。山元春擧の譽これに劣らず、好んで颯爽の筆を用ふ。谷口香嶠歷史畫をよくし、また近頃歐洲を視察して歸りぬ。菊地芳文景色花鳥に長じ、都路華香好んで人物を畫きて、崇高の意を寓せんとす。その他、木島櫻谷、橋本菱華等、年少有望の人甚だ多し。かくて三十五年には、京都後素協會の展覽會を東京上野に

鈴木松年
今尾景年
望月玉泉
原在泉

竹内栖鳳

山元春擧
谷口香嶠
菊地芳文
都路華香
木島櫻谷
橋本菱華

開き、主として京都畫家の作品を陳ねて、二京の優劣を江湖に問ひ、三十六年、第五回内國博覽會の大阪に開くるに至りては、更に京都繪畫の精美を内外に示さんとす、その意義また壯んなりといふべし。

東京、京都ともに近時の趨勢は、巨大の圖を作り、人物畫を主とするにあり。こはいづれも洋風に感化せられて起りしことなるべく、東京は先んじてこれを爲しゝが故にか、既に少しく人物畫に飽きて、別に色彩の妙を山水に現はさんとするものあり。京都は今を人物畫最盛の時期とし、山水を畫くにも、多くは人物を添ふ。東京には人物を寫すに歴史畫、風俗畫ともにあり、京都には古代有職を尚ぶ。なほ二都の顯著なる差は、東京が賦色に苦心し、京都が筆意を重視するにあり。彼は西洋の刺撃の激甚なるに出で、此は古來の國風の因襲に本づく。徒らに賦色に凝りては、形象のこれより重んずべきを忘るゝ過ちあり、特に筆意を弄するは、事相の眞意を捨てゝ、筆者の自家を露出する弊あり、彼此相鑑み、長短互に矯めざるべからず。

思ふに、兩都をはじめ全國に通じて、わが畫家の缺點は、その思想を養はず、また寫生を勉めざるにあり。古今東西の比較研究もとより必要なりといへども、散漫なる智識を外に積むは、統一せる思想を内に保つに如かず。有名なる作の出づるや、これを摸するもの輩出し、形影相追ふは、確固たる信念を闕けばなり、畫家たるものは、その筆を練ると共に、その想を磨かざるべからず。またわが國從來の宿弊は粉本の臨摸、師法の株守にありき。今やこの風を蟬脱して、自由研究の途既に開けたりと稱す。却つて知らず、和漢の束縛を免れて、更に西歐の桎梏に繫がるゝことを。此より彼に移るの際、格法の變動を見るのみにして、眞の改新はいまだしきなり。西洋畫を學ぶはもとより必要なり、しかれども西洋畫を學ぶはわが究竟の目的にあらず、究竟の目的は森羅萬象の精髄を抽得するにあり。和漢古來の名作を以てわが指南車とすべきが如く、西洋畫もまたわが指南車とすべし、しかれども渠はわが眞の師にあらず、眞の師はたゞそれ自然にあり。人みな口を開けば、みづから明治の新人物

と稱す、しかもなほ從來事大の風は依然たり、何ぞ心を平かにして物の本末輕重を區別せざるや。内に思想を養ひ、外に寫生を勉むるは、畫道の第一義にして、また殊に今日の畫家に對して警告すべき要點なり。

要するに現代は繪畫史上特筆すべき一盛時と稱するに憚らざるべし。その前期は日本畫の開發と西洋畫の勃興と竝び行はれ、後期は西洋畫の勢更に加はりて、その日本畫における影響もまた著しくなりぬ。盛は盛なりといへども、なほ試みて成らざるもの多く、若干の問題はまた將來の解決を待てり。

或は曰く、日本畫は美術として到底西洋畫と同等の地位を保つこと能はず。或は曰く、日本人が西洋畫を學ぶも、到底、歐米の人に及ばざらん。或は曰く、日本、西洋の折衷はたゞに混雜を招くのみにして、その功は遂に成し難かるべし。曰く何、曰く何と、論者の言果して然るか、また誤れるか。批評家の千言萬說よりも、余輩はむしろ技術者の實行如何に待たんとす。しかれども翻りて今日畫界の形勢を思ふに、余輩の希望は遠からずして充たさるべきか。聖代の運に乘じて繪畫は流行せり、開明の世に遇ひて手法は細巧なりといへども、方今の人情概するに輕薄浮華、隨うて畫界にも眞率の風、沈痛の趣なく、名利を追ひ、逸樂を索めて、絶えて先人の慘澹たる苦心を知らず。嗚呼、かくの如くんば、いづれの時かよく才人のその技を揮ひて、衆疑を一刀の下に解決するものぞ。

近世繪畫史 終

近世繪畫史

不許複製

定價金貳圓

明治三十六年六月二十日發行
明治三十七年四月十五日再版發行
明治三十八年九月十日三版發行
明治三十九年九月十二日四版發行
明治四十年九月二十五日五版發行
明治四十二年八月廿二日六版發行

明治四十三年九月一日七版發行
明治四十四年九月十五日八版發行
大正二年四月二十日九版發行
大正三年九月廿八日訂正十版印刷
大正三年十月一日訂正十版發行

著作者　藤岡作太郎

發行兼印刷者　東京市日本橋區本町三丁目十七番地　金港堂書籍株式會社

代表者　原亮一郎

印刷所　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　東洋印刷株式會社

賣捌所　各府縣特約販賣所

74
3|84

終